

はつ恋

ツルゲーネフ

神西清訳

青空文庫

P・V・アンネンコフに捧^{ささ}げる

客はもうとうに散ってしまつた。時計が零時半れいじはんを打つた。部屋の中に残つたのは、主人と、セルゲイ・ニコラーエヴィチと、ヴラジーミル・ペトローヴィチだけである。

主人は呼鈴よびりんを鳴らして、夜食の残りを下げるように命じた。

「じゃ、そう決りましたね」と主人は、一層ふかぶかと肘掛椅子ひしかけいすに身を沈めて、葉巻はまきに火をつけながら言った。——「めいめい、自分の初恋はつこいの話をするのですよ。では、まずあなたから、セルゲイ・ニコラーエヴィチ」

セルゲイ・ニコラーエヴィチというのは、まるまると肥ふとつた男で、ぼつてりした金髪きんぱつ・色白の顔をしていたが、まず主人の顔

をちらと眺めると、眼を天井の方へ上げた。

「僕には初恋というものがありませんでしたよ」と、彼はやがての果てに言った。——「いきなり第二の恋から始めたんです」

「それはまた、どうしてね？」

「しごく簡単ですよ。僕は十八の年に初めて、あるとても可愛らしいお嬢さんのあとを追い回しました。ところが、その追いまわし方というのが、こんなこと僕にはさっぱり新しくも珍しくもない、といった風だったのですよ。ちようど、あとになっていろいろな女を口説いた時と、まるつきり同じだったわけです。実を言うと、僕が最初にして最後の恋をしたのは、六つの頃で、相手は自分の乳母でしたが、——なにぶんこれは大昔のことです。二

人の間にあつたことの細こまかしい点は、僕の記憶きおくから消えうせていますし、またよしんば覚えているにしたところで、そんなことを、だれ誰が面白おもしろがるでしょう？」

「すると、どうしたもんですかな？」と、主人が言い出した。――「わたしの初恋にしたところで、大して面白いことはないのですからね。わたしは、現在の妻、アンナ・イヴァーノヴナと知合あいになるまで、誰ひとり恋した覚えはないんですし――しかも我々のことは、万事すらすらと運んだのです。それぞれ父親から縁え談だんをもち出されると、我々は見見る見のお互たがいどうし好きになつて、一足とびに結けっこん婚してしまつたというわけ。わたしの話は、ほんの二一言ふたことで済んでしまいますよ。いや皆みなさん、白状しますと

ね、わたしが初恋の問題をもち出したのは——むしろあなた^{がた}方に期待していたのですよ、お二人とも、老人とは言えないけれど、さりとお若いとも言えない独身者ですから。どうです、あなたは何か面白い話をして下さるでしょうな、ヴラジーミル・ペトロヴィチ？」

「わたしの初恋は、全くのところ、あまり世間なみの部類には入らないものなんです」と、やや言いよどみながらヴラジーミル・ペトロヴィチは答えた。これは四十がらみの、黒髪^{くろかみ}に白を交えた男である。

「やあ！」と、主人もセルゲイ・ニコラーエヴィチも異口同音^{いくどうおん}に。
——「なおさら結構……話して下さい」

「お安い御用ごようです……が、困りましたな。話すのはやめにしまし
よう。わたしは話が不得手ふえてなほうですから、無味乾燥むみかんそうなあつけな
い話になるか、それともだらしのない調子はずれな話になるか、そ
のどっちかです。もし宜よろしかったら、思い浮うかぶだけのことをすつ
かり手帳に書いて、読んでお聞かせしようじやありませんか」
友人たちは初め承知おとしなかつたが、結局ヴラジーミル・ペトロ
ーヴィチは自説を押し通とおした。二週間ののち、彼らが再び寄り合
った時、ウラジーミル・ペトローヴィチは、その約やく束そくを果した。
彼の手帳には、次のようなことが書いてあつた。――

その頃わたしは十六歳さいだった。一八三三年の夏のことである。

わたしはモスクワの、両親のもとに住んでいた。彼らの借り入れた別荘べつそうが、カルーガ関門のほとり、ネスクーチヌイ公園の前にあつたのである。——わたしは大学の入学準備をしていたが、勉強といつてもろくにせず、ゆつくり構えていた。

誰だれひとり一人わたしの自由を束縛そくばくするものはなかった。わたしは

したい放題ふるまに振舞っていたが、とりわけ最後の家庭教師と別れてからはなおさらだった。その教師はフランス人で、自分がまるで

「爆弾ばくだんみたいに」（コム・ユヌ・ボンブ）ロシアへ落下したと
いう考えに、いても立ってもいられず、物凄ものすごい表情を顔に浮べ

ながら、幾いくにち日も幾日もぶつとおしに、ベッドの中でごろごろしていたものである。父のわたしに対する態度は、いわば冷れいたん淡たんな優やさしさにすぎなかつたし、母は母で、わたしのほかに子供がないにもかかわらず、ほとんどわたしを構ってくれなかつた。ほかの心配事で母は手いっぱいだったのである。わたしの父はまだ若くて、すこぶる美男子だったが、財産を目当てに母と結婚した。母の方が十年も年うえだつた。わたしの母親は、気の毒な生活をしてきた。しょっちゅう興奮したり、焼やきもち餅もちをやいたり、ぷりぷりしたりしていたのだが——ただし父の面前でやったわけではない。母はひどく父をこわがっていたし、父は父で、きびしい、冷たい、よそよそしい態度を崩くずさなかつた。……わたしは、あれほど乙おつに

氣どり澄すました、うぬぼれの強い、独ひとりよがりの男を、いまだかつて見たことがない。

その別荘で過した最初の二、三週間のことを、わたしは決して忘れないだろう。すばらしい天気が続いていた。我々が市内から引つ越したのは五月九日で、ちようど聖ニコライの日であつた。

わたしの散歩さんぽは——ときには別荘の庭、ときにはネスクーチヌイ公園、またあるときは関門の外まで足を伸ばすといつた風で、いつも何か本をいつさつ一冊——たとえばカイダノーフの万国史ばんこくしつう通など

——を持って出るのだつたが、それをめくつてみることはめつたになく、とてもたくさん空そらで覚えていた詩を、高らかに朗読する方が多かつた。血潮は体内でたぎりたち、胸はうずき——いや思

い出しても、むずむずするほど甘^{あま}たるく、滑稽^{こっけい}なほどだ。わたしは絶えず何ものかを心待ちにし、絶えず何ものかにびくびくし、見るもの聞くものに心を躍^{おど}らし、全身これ待機の姿勢にあつた。空想が生き生きと目ざめて、いつもいつも同じ幻^{まぼろし}のまわりを素早^{すばや}く駆けめぐる有^{ありさま}様は、朝焼けの空に燕^{つばめ}の群れが、鐘^{しょうろう}楼^{ろう}をめぐつて飛ぶ姿に似ていた。わたしは物思いに沈^{しず}んだり、ふさぎ込んだり、ときには涙^{なみだ}さえ流した。しかし、こうして響^{ひび}き高い詩句や、あるいは夕暮^{ゆうぐ}れの美しい眺^{なが}めによつて、あるいは涙が、あるいは哀^{あい}愁^{しゆう}がそそられるにしても、その涙や哀愁のすきから、さながら春の小草^{おぐさ}のように、若々しい湧^わきあがる生の悦^{よろこ}ばしい感情が、にじみ出すのであつた。

わたしには一頭の乗馬があつた。わたしはそれに自分で鞍くらをおいて、ただ一人どこか遠乗りに出かけたものだつた。馬をギャロップで走らせて、さも自分をトーナメントに出場した中世の騎士きしのように想像したり——ああ、わたしの耳に吹きつける風のなんと朗ほがらかだつたことよ！——あるいは顔を大空へ振向けて、その輝かしい光こうみよう明あと紺碧こんぺきの色を、あけひろげた魂たましいの底まで深く吸い込んだりした。

いま思い返してみると、女の姿とか、女の愛の面影おもかげとかいうものは、ほとんど一度も、はつきりとした形をとつて心に浮んだことはなかつた。しかも、わたしの考えることのすべて、わたしの感じることのすべてには、何かしら新しいもの、言うに言われ

ぬ甘美かんびなもの、いわば女性的なもの……に対する、半ば無意識な、はじらいがちの予感が、潜ひそんでいたのだった。

この予感、この期待は、わたしの骨の髄ずいまでしみわたって、わたしはそれを呼吸し、またそれは血の一滴いってき々々いってきに宿って、わたしの血管を走りめぐるのであったが……実は間もなく実現される運命にあつたのである。

我々の別荘は、円柱の並んだ木造の地主屋敷じぬしやしきと、さらに二棟ふたむねの平べつたい傍屋はなれから成つていた。左手の傍屋は、安ものの壁かべ紙みを作る小つぽけな工場になつてゐる。……わたしは二、三遍さんべんそこをのぞきに行ったが、油じみた上うわ張ばりを着て、頬ほおのこけた顔をした、もじやもじや髪がみの瘦やせた男の子が十人ほど、四角な

印刷台木を締めつける木の梃子へ、しよつちゅうとびついて、
そんな風に自分たちの虚弱い体の重みでもつて、壁紙のまだらな
色模様を捺し出しているのだった。右がわの傍屋は空いていて、
貸家になっていた。ある日——五月九日から三週間ほどたった日
のこと——この傍屋の窓におりていた鎧戸があいて、女の顔が
ちらほらしたのは——どこかの家族が越して来たものと見えた。
忘れもしない、その日の夕食のとき、母は侍僕頭に向つて、隣
へ引越して来たのは誰かと尋ねたが、公爵夫人ザセイキナ
という苗字を耳にすると、まんざら敬意のないでもない調子で、
まず「まあ！ 公爵夫人……」と言つたが、やがてこう付け足し
た、——「きつとどこかの貧乏貴族だろうよ」

「三台の辻馬車つじばしやで越していらつしやいました」と、うやうやしく皿さらを差出しながら、侍僕頭がしたり顔に、——「自家用の車はお持ちではありませんし、家具もごくお粗末そまつで」

「そう」と、母は答えた。——「でもまあ、ましですよ」

父が冷やかな一瞥いちべつを母にくれたので、母は黙だまつてしまった。

全くザセーキナ公爵夫人は、裕福ゆうふくな婦人でありようはずがな

かった。彼女かのじよの借りた傍屋は、いかにも古びて手狭てせまで、おまけ

に天井てんじようの低い家なので、いくらか小金こがねを持った連中なら、と

ても住む気にはならないからである。——とはいえ、わたしはそ

の時、そんなことは気にもとめずに聞き流した。公爵などという

肩書かたがきは、ほとんどなんの作用もわたしに及およぼさなかつた。わた

しは少し前に、シルレルの『群盗』ぐんとうを読んだところだったのである。

二

わたしは毎日、夕方になると、鉄砲てっぽうを持ってうちの庭をぶらついて、鴉からすの番人をするのが習慣だった。——この油断のない、どんよく貪欲でわるがしこ悪賢い鳥に対して、わたしはずっと前から憎悪ぞうおをいだいていたのである。さて今しがた話に出た日も、わたしはやはり庭へ出て行って——並木道なみきみちという並木道をむなしく歩き回ったあげく（鴉はわたしをちゃんと知っていて、ただ遠くの方でき

れぎれに鳴くばかりだった)、ふと低い垣根かきねに近づいた。それは、右手の傍屋はなれの向うへ延びて、その家に属している細い帯のような庭と、うちの領分との境を成しているのだった。わたしは、うなだれて歩いていった。すると不意に、がやがやと人声がした。わたしはひよいと垣根かきねごしに眺めながて——化石したようになってしまった。……奇妙な光景がわたしの眼に映ったのである。

わたしからほんの五、六歩離はなれた所——青々したエゾ苺いちごの茂みしげに囲まれた空地あきちに、すらりと背の高い少女が、縞しまの入ったバラ色の服を着て、白いプラトークを頭にかぶって立っていた。そのまわりには四人の青年がぎっしり寄り合って、そして少女は順ぐりに青年たちのおでこを、小さな灰色の花の束たばで叩たたいているのだっ

た。その花の名をわたしは知らないけれど子供たちには馴染なじみの深い花である。それは小さな袋の形をした花で、それで何か堅かたいものを叩くと、ぽんぽんはじけ返るのであつた。青年たちはさも嬉うれしそうに、てんでにおでこを差出す。一方少女の身振りには（わたしは横合いから見ていたのだが）、実になんとも言えず魅惑みわくて的な、高飛車たかびしゃな、愛撫あいぶするような、あざ笑うような、しかも可愛らしい様子があつたので、わたしは驚おどろきと嬉うれしさのあまり、あやうく声を立てんばかりになつて、自分もあの天女てんによのような指で、おでこをはじいてもらえさえしたら、その場で世界じゅうのものを投げ出してもかまわないと、そんな気がした。鉄砲は草の上へすべり落ち、わたしは何もかも忘れて、そのすらりとした

体つきや、ほっそりした頸くびの根や、奇麗きれいな両手や、白いプラト
クの下からのぞいているやや乱れた淡色あわいろの金髪きんぱつや、その半ば
眠ねむった利口ねむそうな眼もとや、その睫毛まつげや、その下にある艶つややかな
頬ほおなどを、むさぼるように見つめていた。……

「君、おい君ったら」と、不意にわたしのそばで、誰だれかの声がし
た。——「よそのお嬢じょうさんを、そんな風に見つめてもいいものか
い？」

わたしは、ぎよつと顫ふるえあがって、茫然ぼうぜんとしてしまった。……
……すぐそばの、垣根の向うに、黒い髪かみを短く刈りこんだ見知らぬ
男が立っていて、皮肉な眼つきでわたしをじろじろ見ていた。ち
ようどその瞬しゆんかん間、少女もわたしを振り向ふりむいた。……わたしが、

くりくりとよく動く活気づいたその顔に、大きな灰色の眼を見てとつたのも束の間——その顔全体が、いきなりぶるぶる顫えて、笑い出して、白い歯なみがきらめいて、眉毛がさも面白そうに釣りがあがつた。……わたしはさつと赤面すると、地べたの鉄砲を引つつかんで、よく徹る、しかし意地の悪くない高笑いに追われながら、一目散に自分の部屋へ逃げ込んで、ベッドにころがり込むと、両手で顔を隠した。心臓は今にも割れそうに踊っていた。わたしはひどく恥ずかしく、またひどく愉快だった。わたしはまだ身に覚えのないほどの興奮を感じた。

ひと休みすると、わたしは髪を撫でつけ、服を払って、お茶を飲みを下りて行った。うら若い娘の面影は、眼の前にちらついて、

動悸どうきはもう落着いていたけれど、胸が何か快く締めつけられる思
いだった。

「どうかしたのか？」と、不意に父が訊きいた。——「鴉しとを仕留め
たのかい？」

わたしはすっかり父に話してしまおうかと思つたけれど、じつ
ところえて、にやりと独ひとり笑わらいをしただけだった。寝支度ねじたくをしな
がらわたしは、どういふつもりだか知らないが、三さん遍べんほど片足
でくるくる回つて、髪にポマードを塗ぬりたくつて横になるなり、
まるで死人のように、ぐっすり朝まで眠つた。夜明け方にちよつ
と目をさまして、頭をもたげ、感かきわまつてあたりをぐるぐる見
回したが——それなりまた寝入ねいつてしまった。

三

『なんとかして、あの人たちと知合いになりたいものだが?』というのが、あくる朝わたしが目をさめますが早いか、まず頭に浮んだ考えだった。わたしはお茶の前に庭へ出てみたが、例の垣根かきねへはあまり近寄らず、誰だれの姿も見かけなかった。お茶が済むと、わたしは二、三さんべん遍、別荘べつそうの前の通りを行ったり来たりして——遠目に窓をのぞいてみた。……カーテンの陰かげに、あの人の顔が見えたような気がしたので、わたしはあわてて、さつさと前を行き過ぎた。『だが、どうしても知合いにならなくちゃ』と、わたし

は、ネスクーチヌイ公園の前に拡が^{ひろ}っている砂原を、めちやめちやに歩き回りながら考えた。『しかし、どうしたらいいかな？

そこが問題だ』わたしは、昨日ひよいと出会った時のことを、ごく細かな点まで一々思い浮べてみた。どうしたわけだか、とりわけはつきり思い浮ぶのは、彼女^{かのじよ}がわたしに浴びせたあの笑い声だった。……とはいえ、わたしがしきりに気をもんで、いろんな計画を立てているうちに、運命はちやんとお膳^{ぜんだ}立てをしてくれたのである。

わたしのいない間に、母は新しい隣^{りんじん}人から、灰色の紙にしたためた手紙を受取っていた。しかもそれを封^{ふう}じた黒茶色の封^{ふう}蝋^{ろう}ときたら、郵便局の通知状か安葡萄酒^{やすぶどうしゆ}の栓^{せん}にしか使わないうよう

な代物しろものだった。その手紙は、いかにも無学らしい文章に加えるに汚きたならしい筆跡ひっせきをもつて書いてあつて、要するに公こう爵しゃく夫人ふじん人がわたしの母に庇護ひごしてもらいたい旨むねを願ひ出たものだった。

つまり、公爵夫人の言葉によると、わたしの母は二、三の重要な人物と相識そうしきの間柄あいだがらであるが、今や夫人はすこぶる重大な訴訟しょうしゆを起して、彼女自身の運命もまたその子女の運命も、か

かつてそれら人物の手中にあるというのである。『率事そつながらわたしこと』と、書いてあつた、——『叔女として同じ叔女たるあなた様にお手紙まいらせ候そうろう。この期会にめぐまされ候こと、まことに嬉ばしき限りにて』しかじかといった調子で、終りに彼女は母にむかつて、訪問をお許し願ひたいと申出ていた。わたしが外

から帰ってみると、母は御機嫌斜めごきげんななのていだった。父が不在なので、誰と相談しようにも相手がなかったのだ。いやしくも『叔女』であり、おまけに公爵夫人ともあろう人に、返事をしないわけにはゆかず、ではどう返事をするかという段になると——母は途方とほうに暮れくざるを得なかった。返事をフランス語で書くのは、場はずれのよな気がするし、さりとてロシア語の綴りつづにかけては母は不得手ふえてだったし——自分でもそれを知っていたので、みすみす恥はじをさらしたくなかったのである。

母はわたしが帰って来たのを喜んで、顔を見るなり、これから公爵夫人のところへ行って、口頭こうとうをもって、わたしの母は力の及ぶ限りおよいつ何時なんどきでも奥様おくさまのお役に立ちたいと存じている旨むね

を述べ、十二時過ぎに御光来をお待ちすると伝えるように言いつけた。自分のひそかな念願が、思いもかけず早速かなうことになったので、わたしは嬉しくもあれば空恐ろしくもあつた。とはいえわたしは、自分をとらえている当惑を表にあらわさず——まず自分の部屋へ引取つて、新しいネクタイと小さなフロツクコートを着けることにした。家にいる時は、まだわたしは短い上着を着て、折り襟おえりのカラーをしていたのだが、実はそれが厭いやでならなかつたのである。

四

傍屋はなれの、狭せまくるしい薄うすぎたない控ひかえ室しつへ、わたしが押おさえても止
 らぬ武者ぶるいに総ふ身を震ふるわせながら入いりて行いくと、そこでわた
 しを迎むかえたのは、白しろ髪があたまの老ろう僕ぼくだつた。銅あかがね色いろのすすけ
 た顔かほに、豚ぶたのような無む愛あい想そうな小こさい眼めをしておまけに額かぶからこめ
 かみへかけて置たまれてゐる皺しわの深こいことといつたら、わたしが生
 れてこの方かた見たこともないほどだつた。彼は食くひ荒あされた鯨にしんの背せ
 骨ほねを一つ皿ひらに載のせていたが、奥おくの間まへ通とずるドアを後のちろ足あしで閉しめ
 ながら、突とつ拍び子しもない声こゑでいきなり、

「なんの御用ごようで？」と言いつた。

「ザセーキナ公こう爵しゃく夫ふじん人ひとはおいででしようか？」と、わたしは
 きいた。

「ヴオニフアーチイ！」と、ドアの向うから、がらがらした女の
声と呼んだ。

老僕が無言でわたしに背を向けた途端とたんに、お仕着せしきのひどくすり切れた背中が丸見えになって、そこに赤さびの出た定紋じょうもん入りのボタンが、ぽつんと一つ残っているのが目についたが、彼はそのまま皿ゆかを床へ置くと、奥へ引ひつ込こんでしまった。

「警察へ行って来たかい？」と、同じ女の声がまたした。老僕が何やらぼそぼそ言うのと、——「ええ？……誰だれか来たって？」と、訊きき返して、「となりの坊ぼっちゃんかい？　じゃ、お通しおし」

「どうぞ客間へお通りなすつて」と、老僕はまたわたしの前に現われて、皿を床から持ち上げながら言った。わたしは身仕舞みじまいを正

して、『客間』なるものへ入って行つた。

いざ入つてみるとそこは、あまり小奇麗こぎれいとも言えぬ手狭な一間で、貧乏びんぼうくさい家具の並ならべ方も、まるで急場しのぎにやつてのけたといった様子だつた。窓ぎわの、片肘かたひじの折れた肘掛椅子ひじかけいすに坐すわつてゐるのは、年の頃とし五十ほどの、髪かみをむき出しにした器量けいりやうのわるい婦人で、着古した緑色の服を着て、まだら色の毛糸えりまの襟えりま巻まきを首に巻まいていた。彼女かのじよの小さな黒い眼は、いきなり吸すいて着くように私の顔にそそがれた。

わたしはそばへ歩み寄つて、一礼した。

「失礼ですが、ザセーキナ公爵夫人でいらつしやいますか？」

「ええ、わたしがザセーキナ公爵夫人です。あなたはVさんの御

子息でいらつしやるの？」

「そのとおりです。わたしは母の使いで参りました」

「さあ、お掛けなさいな。ヴオニフアーチイ！ わたしの鍵はど
こ、お前見なかつたかい？」

わたしはザセーキナ夫人に、その手紙に対する母の返事を伝え
た。彼女はそれを聞きながら、太い赤い指で窓がまちを軽く叩い
ていたが、わたしが口上を終ると、もう一遍わたしをじつと見
つめた。

「大層結構です、ぜひ伺いませう」と、やがて彼女は言った。

——「でも、あなたはまだほんとお若いのね！ お幾つですの、
失礼ですけれど？」

「十六です」とわたしは、思わず口ごもりながら答えた。

公爵夫人はポケットをさぐ探つて、何やらいつぱい書き込んだ油じみた着付を取出すと、つい鼻先まで持つていつて、その検分にかかった。

「結構な年頃だこと」と、彼女は、椅子の上で身をねじ曲げたり、もぞもぞしたりしながら、不意に言い出した。——「どうぞあなた、お気楽になさいましな。宅では万事無造作ですから」

『どうも無造作すぎるな』とわたしは、思わず湧わき上がる嫌けん悪おの情をもつて彼女のぶざまな様子をじろじろ眺ながめながら、心の中で考えた。

と、その瞬間、客間のもう一つのドアがいきなりぱつと開いて、

敷居しきいの上に姿を現わしたのは、昨日庭で見かけたあの娘むすめだった。

彼女は片手を上げたが、その顔にはちらりと薄うす笑いわらが浮んだ。

「これがうちの娘です」と、公爵夫人は、肘で娘をさして言った。

——「ジーノチカ、お隣となりのVさんの御子息だよ。お名前はなんておっしゃるの、失礼ですが？」

「ヴラジーミルです」と、わたしは立ち上がって、興奮のあまり舌をもつらせながら答えた。

「で御父称は？」

「ペトローヴィチです」

「まあ！ わたしの知合いに警察署長をしている方がありました
が、その人もやっぱりヴラジーミル・ペトローヴィチでしたっけ。

ヴオニフアーチイ！ 鍵は捜さなくつてもいいよ。ちやんとわたしのポケットにあつたから」

少女は心もち眼を細めて、首をやや傾げたまま、相変らずにやにやしなから、わたしを見つめていた。

「あたしもう、ムツシユー・ヴォルデマールにはお目にかかつたわ」と、彼女は口をきつた。（その銀の鈴を振るような声の響きは、何かこう甘美な冷たい感じをなして、わたしの背筋を走つた）——「ねえ、あなたをそう呼んでもいいでしょう？」

「ええ、そりやもう」と、わたしは、ますます舌をもつらせた。

「そりや、どこでなの？」と、公爵夫人が訊いた。

公爵令嬢は、母の問いには答えずに、

「あなた今、お忙しくつて？」と、彼女は、わたしから眼を放さずと言った。

「いいえ、ちつとも」

「じゃ、毛糸をほどくお手伝いをして下さらないこと？ こつちへいらつしやいな、あたしの部屋へ」

彼女はわたしに、こつくりうなずいて見せると、さつさと客間を出て行った。わたしはあとに従った。

我々の入った部屋は、家具も幾分はましで、その並べ方も、前の部屋より趣味しゆみがあつた。もつともその瞬間しゆんかん、わたしはほとんど何ひとつ目に留める余裕よゆうがなかつた。わたしは、まるで夢ゆめの中にでもいるように身を運びながら、何やら馬鹿ばか々々しいほど緊き

張んちよう した幸福感を、骨の髓ずいまで感じるのだった。

公爵令嬢は腰こしを下ろして、紅あかい毛糸たばの束はこを箱から出すと、向いの椅子をわたしにさしてみせて、一生けんめい結び目を解きほぐしてから、それをわたしの両手に掛けた。そこまでする間じゆう、彼女はいつさい無言のまま、何かさも面おもしろ白しろくてたまらないといった風の緩かん慢まんな身振りみぶりで、相変らずの明るい狡ずるそうな薄笑いを、やや少しひらいた唇くちびるに浮べていた。彼女は毛糸を、折り曲げた力ルタ札ふだに巻きはじめたが、そのうち不意に、ぱつと素早すばやく私の顔を、なんとも言えない晴れやかな眼差まなざしで射たので、わたしは思わず顔を伏ふせてしまった。彼女の眼は、たいていは軽く細目になつていたので、それが時たまいっばいに見開かれると――

顔つきがすっかり変ってしまつて、まるでその面輪おもわに光がみなぎりあふれるように見えた。

「ねえ、昨日あたしのしたこと、どうお思ひになつて、ムツシユー・ヴォルデマール？」と、しばらくしてから彼女が訊いた。——「きつとあなたは、けしからん女だとお思ひになつたでしょうね？」

「いいえ、僕ぼく……お嬢さん……僕は何にもその……とんでもない……」わたしの答えは、しどろもどろだつた。

「ね、いいこと」と、彼女は切つて返した。——「あなたはまだ、あたしという女を御存じないけれど、あたし、とつても妙みょうな女なのよ。あたしはね、いつも本当のことだけ言つてもらいたいの。」

さつき伺うと、あなたは十六だそうですね、あたしは二十一年なんですものね。あたしの方が年上でしよう、だからあなたは、あたしにいつも本当のことばかり言わなけりやいけないのよ……そして、あたしの言うことをきかなくてはね」と、彼女は言い足して、——「さ、あたしの顔をまっすぐ見てちようだい。なぜ見ないの？」

わたしはますます、あがってしまったが、とにかく眼を上げて、彼女の顔を見た。彼女はにっと笑ったが、それはさつきのとは違^{ちが}って、好意のある微笑^{びしょう}だった。

「あたしの顔を見てちようだい」と、彼女は、優しく^{やさ}声を落しな^いがら言った。——「そうされても、あたし厭^{いや}じやないの。……あ

たし、あなたの顔が気に入ったわ。あなたとは、仲好しなかよになれそうな気がするのよ。でもあたしは、あなたのお気に召めしまして？」と、抜け目ぬめなく彼女は言い足した。

「お嬢さん……」と、わたしは言いかけた。……

「まず第一、あたしをジナイーダさんと呼んでちょうだい。それから第二に——子供のくせに——（と言って、彼女は言い直した）——青年のくせに——感じたとおりをまっすぐに言わないなんて、いけないことだわ。それは大人のすることよ。どう、あたしあなたのお気に召して？」

彼女がわたしを相手に、こんなに打解けて話してくれることは、わたしにとって実に嬉しいうれことだったけれど、とは言えわたしも、

少し腹が立った。わたしは、そうそう子供と見てもらいますまい
という意気ごみで、できるだけ磊落らいらくな、しかも鹿爪しかつめらしい顔
つきになって、こう言つてやった。——「もちろん、とても気に
入りましたよ、ジナイーダさん、僕は、それを隠そうとは思いま
せん」

彼女は、ゆっくり句切りながら頭を振つて、——「あなたは家
庭教師がついているの？」と、だし抜けに尋ねた。たず

「いいえ、僕にはもうとつくに家庭教師なんかいません」

それは嘘うそだった。例のフランス人と生き別れをしてから、まだ
一ひと月つきにもならないのである。

「へえ！ それでわかつたわ——あなた、もうすっかり大人ねえ」

彼女は軽くわたしの指をはじいて、——「手をまつすぐにしてらっしゃい！」——そう言つて彼女は、せつせと糸球いとだまを巻きだした。

しばらく彼女が眼を上げないのに乗じて、わたしは彼女をつくづく眺め始めたが、それも初めは盗み見ぬすみだったものが、やがてだんだん大胆だいたんになつていった。彼女の顔は、昨日より一層魅力みりよくが増して見えた。目鼻だちが何から何まで、実にほっそりと磨みがかれて、じつに聡明そうめいで実に可愛かわいらしかった。彼女は、白い巻揚まきあげのカーテンを下ろした窓に、背を向けて坐つていた。日ざしは、そのカーテンを通して射さし入つて、柔やわらかな光を、彼女のふさふさした金色の髪や、その清らかな首筋や、流れ下る肩かたの曲線や、優

しい安らかな胸のあたりに、ふりそそいでいた。——わたしはじつと彼女を眺めているうちに、彼女がなんとも言えず大切で、親愛なものに思えてきたのだ！ わたしは、もうずっと前から彼女を知っていて、彼女と知合いになるまでは、何ひとつ知りもせず、生きた甲斐かひもなかつたような気がした。……彼女はもうだいぶ着古した地味な色合いの服を着て、エプロンを掛けていた。わたしは、その服やエプロンの襷ひだを一つ一つ、いそいそと撫なでたいような気持がした。彼女の靴くつの先が、その服の下からのぞいている。わたしはできることなら、うやうやしくその靴にぬかずきたいとさえ思った。『とうとう俺おれは、こうして彼女の前に坐っているんだ』と、わたしは思った——『俺は彼女と知合いになったのだ……』

…なんとという幸福だろう、ああ！』わたしはすんでのことで、喜び勇んで椅子からとび下りそうになつたが、おいしいおやつにありついた赤ん坊あかぼうみたいに、足をちよいとばたつかせるだけで我慢がまんした。

わたしは、水の中の魚のようにいい気持で、一生この部屋から出て行きたくない、この場から動きたくないと思つた。

彼女の目蓋まぶたがそつと上がつて、またもやその明るい眼がわたしの前に優しく輝かがやき出したかと思うと、またしても彼女はいつとあざけるように笑つた。

「なんであたしを見つめてらっしゃるの」と、彼女はゆつくり言つて、指を立ててわたしをおどかした。

わたしは赤くなった。……『この人はなんでもわかるんだ、なんでも見えるんだ』という考えがわたしの頭をかすめた。『全く、どうしてこの人に、何もかもわからないはずがあるう、何もかも見えないはずがあるう!』

不意に隣の部屋で、何か物にぶつかる音がして——サーベルが鳴り出した。

「ジーナや」と、客間で公爵夫人が呼んだ。——「ベロヴゾーロフさんが、お前に猫の子ねこを持ってきて下すつたよ」

「猫の子!」と、ジナイーダは叫さけぶと、ぱつと椅子から立ち上がって、毛糸の毬まりをわたしの膝ひざへほうり出したまま、部屋から駆かけ出して行った。

わたしも立ち上がって、毛糸の束と毬とを窓がまちに載せると、そこを出て客間へ入ったが、途端に呆気にとられて棒立ちになった。部屋の真ん中には縞しまの入った小猫が、可愛い足をひろげて仰あ向きおむになつていた。ジナイーダはその前に膝をついて、そつと猫の顔を持ちあげていた。公爵夫人の横には、窓と窓の間の壁かべをほとんど全部ふさいで、薄色の髪の毛を渦うずまかせた立派な青年の立つているのが、逆光線の中に、だんだんはつきり見えてきた。軽け騎兵いきへいの士官で、血色のいい紅あかい顔をして、眼が飛び出している。「なんて滑稽こっけいなんでしょう！」と、ジナイーダは何度も言つて、「眼だつて灰色でなくて、緑色だし、それに耳だつてなんて大きいんでしよう！ ありがとう、ベロヴゾーロフさん！ あなたと

でも親切ねえ！」

その軽騎兵は、昨日見かけた青年たちの一人であることにわたしは気づいたが、にっこり笑って一礼する拍子に、拍車を打合せて、サーベルの釣輪つりわをがちやりと鳴らした。

「昨日あなたは、縞の子猫で大きな耳をしているのが欲しいと仰せでありましたから……このとおり、手に入れたのであります。

男子の一言——でありますから」と言つて、また一礼した。

子猫はかぼそい鳴き声を立てると、床ゆかを嗅かぎ始めた。

「おなががすいてるのね！」と、ジナイーダは叫んで、——「ヴオニフアーチイ、ソーニヤ！ 牛乳を持って来て」

小間使は、古ぼけた黄色い服に、色のさめたネツカチーフを首

に巻いて、牛乳の小皿を手に入ってくると、その皿を子猫の前に置いた。子猫はぴくりと身震いして、眼を細め、ぴちやぴちやなめだした。

「まあ、バラ色の小^ちつちやな舌」と、ジナイーダは、頭が床に届かんばかりに身をかがめ、横合いから猫の鼻の下をのぞきこみながら、そう指摘^{してき}した。

子猫はおなかがかくちくになると、すまし返って前足をかわるがわる動かしながら、喉^{のど}を鳴らし始めた。ジナイーダは立ち上がって、小間使の方を振向くと、平気な声で、「あっちへ持っておいで」と言った。

「子猫の褒^{ほう}美^びに——お手を」と、軽騎兵は、にやりと笑うと、新

調の軍服にきっちり締め上げられた^{たくま}逞しい全身を、ぐいと反り返らせた。

「両方よ」と、ジナイーダは答えて、彼に両手を^{さしの}差伸べた。軽騎兵がキスしている間、彼女は肩越しにわたしを見ていた。

わたしは^{ひと}一とところにじつと立ったまま——いったい笑ったものか、何か言ったものか、それともこのまま^{だま}黙っていたものか、それがわからなかった。すると^{とつぜん}突然、控え室のあけっぱなしのドア^ご越しに、うちの下男のフョードルの姿が眼に映った。わたしに何かを合図している。わたしは何^{なにげ}気なく出て行つた。

「なんだい！」と、わたしは訊いた。

「お母様がお呼びするようにおっしゃいましたんで」と、彼はひ

そひそ声で、——「あなた様が返事を持ってお帰りにならないので、大層お腹立ちでございますよ」

「でも僕、そんなに長居ながいしたかい？」

「一時間の余になります」

「一時間の余！」と、思わずわたしは鸚鵡おうむがえ返しに言つて、客間へ引返すと、お辞儀しぎしたり足ずりしたりし始めた。

「どこへいらつしやるの？」と公爵令嬢が、軽騎兵の後ろから顔をのぞかせて聞いた。

「僕、うちへ帰らなくちゃならないのです。じゃ、こう申しましたよ。どうか」と、老夫人に向つて言い添そえた。——「一時過ぎにお見えになりますって」

「そうね、そう申上げて下さい、坊ちゃん」

公爵夫人があわただしく煙草たばこ入れを出して、うるさい音を立てて嗅ぎ始めたので、わたしはぎよつとしたほどだった。——「そう申上げて下さい」と、彼女は、うるんだ眼でまばたきして、ふんふん唸うなりながら繰返くりかえした。

わたしはもう一遍お辞儀をすると、くるりと回れ右をして部屋を出したが、照れくさい感じが背中を這はっていた。後ろから見られていることがわかつている時、ごく若い人が感じるあれである。

「よくって、ムツシュー・ヴォルデマール、また遊びにいらつしやいね」と、ジナイーダは叫ぶと、また大声で笑い出した。

なぜあの人は笑ってばかりいるんだろう？ と、わたしは、帰

るみちみち考えた。お伴ともにはフョードルが、一ひとこと言もわたしに話しかけずに、不服らしい様子で後ろからついてくる。母はわたしを叱しかりつけて、あの公爵夫人なんかの所で何をいつまでしていたんだろうと、呆あきれ返っていた。わたしは何とも答えずに、自分の部屋へ引つ込んだ。すると突然ひどく悲しくなった。……わたしは泣くまいと懸けんめい命めいになった。……あの軽騎兵がねたましかつたのである。

五

公爵夫人こうしゃくふじんは約束やくそく通り母を訪ねて来たが、母の氣に入らな

かった。わたしは二人の会見の場に居あわさなかつたけれど夕食
 の時母が父に物語つた言葉によると、あのザセーキナという公爵
 夫人は、どうも ファム・トレ・ヴェルゲール ひどく俗っぽい女らしく思われる。あの夫人は、
 どうぞ自分のためにセルギイ公爵に運動してくれとしつこくせが
 んで、ほとほと母をうんざりさせた。あの夫人はしよつちゆう何
 かしら そしやう 訴訟や事件を起こして——それも ド・ヴィレーン・ザフエー 卑しい金
ル・ダルジャン 銭問題 ちが なのだから——てつきりとんでもない食わせ者に違
 いない、といった散々の評判だった。それでいながら母は、あの
 夫人を むすめ 娘さんと いっしょ 一緒に明日の夕食に招いた、と言ひ足した（こ
 の『娘さんと一緒』という言葉を耳にすると、わたしは鼻を さくら 皿の
 中へ つ 突つ こ 込まんばかりにした）——とにかくあの夫人は となり 隣どうし

ではあり、名のある人でもあるから、というのが理由だった。

これに対して父は母に、今やつとあの奥おくさんがどういう人かを
思い出したと告げた。それによると父は若い頃ころ、今は亡ないザセー
キン公爵を知っていた。立派な教育はあつたけれど、薄うすっぺらな
下らん男で、パリに長らく行つていたため、『パリっパリジャン児』と呼ば
れていた。彼かれは大層金持だったが、カルタで全財産をすつてしま
い———というわけだか、まあ金が目当てだつたらしくも思える
が———とは言え選びさえすれば、もつといい相手はあつたのに
(と父は言い足して、冷たい微笑びしょうを漏もらした)———どこかの下
役人の娘と結けっこん婚して、その結婚ののち、投機に手を出して、今
度は完全に破産してしまった。

「どうぞあの夫人が、お金を貸してくれなどと言ひ出さなけりや
いいが」と、母はすかさず言つた。

「それも大いにあり得ることだね」と、父は平然として言つた。

——「あの奥さん、フランス語を話すかね？」

「それが成っていないの」

「ふん。まあ、そんなことはどうでもいい。君は今、あの人の娘
さんも招待したとか言つたね。誰かが言つていたつけが、とても
可愛らしい、教育のある娘だそうじゃないか」

「へえ！　じゃその娘さん、お母さんに似なかつたわけですね」

「父親にもね」と、父は応じて、——「あの男は教育こそあつた
が、しかし頭がなかつたよ」

母はほつと溜息ためいきをついて、考え込んでしまった。父も黙だまつてしまった。わたしはこの会話の間じゆう、ひどく照れくさかった。

夕食が済すむと、わたしは庭へ出て行つたが、鉄砲てっぽうは持たなかつた。わたしは、『ザセーキン家の庭』へは近寄るまいと心に誓ちかつたつもりだったが、うち勝ちがたい力に引かされて、ふらふらその方へ足が向いて——しかもそれが、無駄むだではなかつた。わたしが垣根かきねのそばまで行くか行かないうちに、ジナイーダの姿が眼に入つたのだ。今度は彼女かのじよ一人だつた。両手で小さな本をささえて、ゆつくり小径こみちを歩いていた。向うはわたしに気づかなかつた。

わたしはあやうくやり過ぎしそうになったが、はつと気がついて、咳せきばら払いをした。

彼女は振向ふりむいたが、立ち止りもしないで、まるい麦わら帽子ぼうしについている幅はばの広い水色のリボンリボンを、片手で払いはらのけると、ちらとわたしに眼めをそそぎ、軽くほほえんだなり、またもや眼を本へ落してしまった。

わたしは庇ひさしのついた帽子を脱ぬいで、しばらくその場で迷っていたが、やがて重い物思いに沈しずみながら、そこを離はなれた。——『あクのひとにとつて、わたしはなんだろう？』とわたしは、（どうした風の吹ふきまわしか）フランス語で考えた。

聞き覚えおぼのある足音が、後ろで響ひびいた。振返ひらつてみると——こ

つちへ、例の速い軽快な足どりでやってくるのは、父だった。

「あれが公爵令嬢かね？」と、父が尋ねた。

「お嬢さんです」

「はて、お前あの人を知ってるのかい？」

「けさ公爵夫人の所で会ったんです」

父は立ち止ったが、急に踵でくるりと回ると、とつて返して行

った。そして、垣根越しにジナイーダと肩を並べる辺まで行くと、

父は丁寧ていねいに彼女に会釈えしやくをした。彼女も会釈を返したが、幾

分ぶんびつくりしたような色を顔に浮べて、本を下へおろした。父

の後ろ姿を見送っている彼女の様子が、わたしには見えた。わた

しの父の服装ふくそうはいつも、とてもりゆうとして、独特の味があつ

て、しかもさつぱりしたものだ。けれどこの時ほど父の姿がわたしに、すらりと格かつこう好こうよく見えたこともなかつたし、その灰色の帽子が、こころもち薄くなりかけた捲毛まきげの上に、すつきり合つて見えたこともなかつた。

わたしはジナイーダの方へ行こうとしたが、彼女はわたしには眼もくれず、また本を上へあげると、向うへ行つてしまつた。

六

その晚いっぱいとあくる朝の間じゆう、わたしはなんだか鬱うつ々つと沈しずみ込こんだ氣持で過した。忘れもしない、わたしは勉強し

ようと思つて、カイダノーフを読み始めたが——結局この有名な教科書のぱらりと組んだ行やページが、眼めの前にちらちらするばかりで、なんにもならなかつた。十じっぺん遍も立て続けにわたしは、『ユリウス・ケーザルは武勇世にすぐれ』という文句を読み下したが——何ひとつ頭に入らないので、本を投げ出してしまった。夕飯の前になると、わたしはまたポマードを塗ぬりたくつて、またもやフロックコートとネクタイを着けた。

「そりや、どういうつもりなの？」と、母が尋たずねた。——「お前はまだ大学生じゃないんですよ。それに、試験だつて受かるかどうかわかりもしないのにさ。あの短い上着だつて、まだついこのあいだ縫ぬわせたばかりじゃないか？ 勿もつ体たいないですよ！」

「お客様が来るので」とわたしは、ほとんど必死になつてささやいた。

「馬鹿をお言い！ あれがお客様なものですか！」

降参するよりほかはなかつた。わたしはフロックを短い上着に着替えたが、ネクタイは取らなかつた。

公爵夫人は娘を連れて、夕食の三十分前にやつて来た。老

婦人は、すでにわたしにはお馴染の例の緑色の服の上に黄色いシ

ヨールを引っかけ、火のような色のリボン飾りのついた旧式の室

内帽をかぶつていた。彼女たちはまち手形の話を作り出して、

溜息をついたり、自分の貧乏を訴えたり、『おねだり』を始

めたりするのだったが、礼儀も作法もさっぱりお構いなしで、相

変らず騒々しく嗅ぎ煙草を嗅いだり、椅子の上で気まま勝手に身をねじ曲げたり、もぞもぞしたりしていた。自分が公爵夫人だなどということとは、てんで念頭に浮んでも来ないらしい。

それに引替えジナイーダは、すこぶるツンと、ほとんど傲慢なほどに構えて、あっぱれ公爵令嬢であった。その顔には、

冷やかな、ぴくりともしない尊大な表情が表われていたので——わたしにはまるで別人のように見え、あの眼差しもあの微笑も、てんで見当らなかつたけれど、それでいてこの新しい姿になつても、わたしにはやはり素晴らしいお嬢さんと思われた。着ているのは、ふわりとした薄い紗の服で、淡青い唐草模様がついていた。髪はイギリス風に、長い房をなして両の頬に垂れかかつて

いた。この髪かたちが、彼女の顔の冷やかな表情に、しっくり合っていた。

父は食事の間、彼女の横に席を占めて、もちまえの優美で落着きはらった慇懃^{いんぎん}さで、隣^{りんせき}席の令嬢のお相手をつとめていた。父は時おり彼女の顔をちらりと眺^{なが}めやる——彼女の方でも、時たま父を見返す。その彼女の顔つきが、じつに不思議な、ほとんど敵意をふくんだものだった。二人はフランス語で話し合っていたが、わたしは今でも思い出す、ジナイーダの発音の奇麗^{きれい}さに、びつくりしたものである。公爵夫人は食事の間も、例によってちつとも遠慮^{えんりよ}せずに、さかんに食べては、料理を褒^ほめそやした。母は、いかにもこの相手が荷^{にやっかい}厄介らしく、なんだか滅^め入^いったよう

な気乗りのしない調子で、しぶしぶ受け答えをしていた。父は時たま、かすかに眉まゆの根をひそめた。ジナイーダもやはり、母の氣に入らなかつた。

「なんだか高こう慢まんちきな娘だこと」と、母はあくる日そう言った。

——「よく考えてみるがいいわ——何を高慢ぶることがあるんだろう——アヴェク・サ・ミーヌ・ド・グリゼットあんなグリゼットみたいな顔をしてさ！」

「君は確か、パリパリの下町娘ゼットを見たことがないはずだが」と、父はチクリと刺さした。

「ええ、ありがたいことにね！」

「もちろん、ありがたいことには違ちがいないが……だが、それでどうしてあれらのことを、とやかに言えるのかね？」

わたしの方へは、ジナイーダはてんで注意を向けずじまいだつた。食事が済むと間もなく、公爵夫人は別れの挨拶をし始めた。「どうぞ今後とも、よろしくお力添えのほどを、奥様にも旦那さま
 那樣にもお願いしますよ」と、彼女は、歌うように声を引っぱりながら母と父に言った。——「仕方ありませんわ！ いい時もありましたけれど、返らぬ昔でしてねえ。これでももとは——奥方様と立てられたものですけど」と彼女は、いやな笑い声を立てて言い添えて、——「背に腹は、とやら申しましてねえ」

父はうやうやしく夫人に一礼すると、控え室のドアまで腕を貸して送つて行つた。わたしは、つんつるてんの短い上着を着たまま、じつとそこに突つ立つて、死刑を言い渡された囚人よろ

しくのていで床を見つめていた。ジナイーダの冷たい態度を見て、すっかり悄気しよげてしまったのである。ところが、ああなんとという驚おどろきだつたろう。彼女はわたしの前を通り過ぎる時、例の優しい表やさ情を眼に浮うかべて、わたしにこうささやいたのだ、——「今夜八時に、うちへいらつしやいね、よくつて、きつとよ……」わたしはあまりの思いがけなさに、両手をひろげたが——それなり彼女は、白いスカーフをふわりと頭にかけると、さつさと向うへ行つてしまつた。

七

きつかり八時に、わたしはフロツクコートを一着におよび、頭の髪かみを小高く盛り上げて、公爵夫人こうしゃくふじんの住家すみかなる傍屋はなれへ入つて行つた。例の老僕ろうぼくが、無愛想な眼めでわたしをじろりと見ると、しぶしぶ腰掛こしかけから尻しりをもたげた。

客間には陽気な人声が聞えていた。わたしはそのドアをあけると、あつとばかり後ろへすさつた。部屋のまん中には、椅子いすの上うへに公爵令嬢れいじようが突つつ立ち上たがって、男の帽子ぼうしを眼の前に捧ささげている。椅子いすのまわりには、五人の男がひしめき合っている。彼らは我がちに帽子の中へ手を突つつ込こもうとするのだが、令嬢はそれを上へ上へと持ち上げて、力ちからいっぱい揺ゆすぶっていた。わたしの姿を認めると、彼女かのじよは大きな声で、「待つてよ、待つてよ！」

新しいお客様だわ、あの人にも札をあげなくちや」と言うなり、ひらりと椅子から飛び下りて、わたしのフロックの袖の折返しをつかまえると、——「さあ、いらつしやいってば」と言った。——「何をぼんやり立ってるの？ 皆さん《メシユ》、御紹介——

「何をぼんやり立ってるの？ 皆さん《メシユ》、御紹介
いたしますわ。この方はムツシユ・ヴォルデマール、お隣の坊
ちやんです。それからこちらは」と彼女は、わたしに向つて順ぐ
りに客を指さしながら、付け加えた。「マレーフスキイ伯爵、
お医者の方ルーションさん、詩人のマイダーノフさん、退職大尉のニ
ルマーツキイさん、それから軽騎兵のペロヴゾーロフさん、こ
の方にはもうお会いになつたわね、どうぞ皆さん、仲よくなすつ
てね」

わたしはすっかりあがってしまつて、誰だれにもお辞儀じぎをせずいたほどだった。医者いしやのルーシンというのが、あのととき庭にわでわたしに小つぴどく恥はじをかかした例れいの浅黒あさくろい男おとこであることはわかったが、あとはみんな初対面はつたいめんだった。

「伯爵はくしやく！」と、ジナイーダはあとを続けた。——「ムツシユー・ヴオルデマールにも札はがきを書いて上げてちようだい」

「それは不公平ふくへいですな」と、心もちポーランドなまりのある言葉つきで、伯爵はくしやくは反対はんたいした。これは頗すこぶる美貌びぼうの、凝こつた身みなりをしした栗色くりいろの髪かみの男おとこで、表情へいしやうに富とんだ鳶色とびいろの目めと、細ほい小ぢんまちりした白しろい鼻はなをもち、小つぽけな口くちの上に、ちよび髭ひげを生はやしている。——「この人ひと、罰金ばつぎんごつこの仲間なかまに入いらなかつたんです

からねえ」

「不公平だ」と、ベロヴゾーロフと、もう一人別の男が相槌を打った。あとの方の男は、退職大尉と呼ばれた人物で、年は四十九がらみ、みつともないほどのアバタ面づらで、アラビア人みたいに髪の毛が縮れて、猫背ねこせで、がに股またで、肩章けんしょうのない軍服を着て、胸のボタンをはずしている。

「札を書いて上げなさいってば」と、令嬢は繰返くりかえした。――

「そりやなんの暴動なの？ ムツシユ・ヴォルデマールは初めていっしょ一緒になつたんだから、今日はこの人特別とくべつあつか扱あつかいよ。ぶつ

ぶつ言わないで、書いてちようだい、あたしそうしたいんだから」

伯爵は肩をすくめたが、素直すなおに一礼すると、宝石入りの指輪で

飾りたてた白い手にペンをとりあげ、小さな紙切れを裂き取って、それに書き始めた。

「ではせめてヴォルデマール氏に、ことの次第を説明して上げてもいいでしょう」と、嘲るような声でルーシンが言い出した。――「さもないと、すっかりまごついておられるようですからな。

実はね、君、我々は罰金ごっこをしているんだが、令嬢が罰金を払うことになったので、幸運のくじを引当てた人は、令嬢のお手にキスする権利を得るわけなんです。わかったですか、僕の言ったことが？」

わたしはちらりと彼の顔を見たばかりで、相変らず茫然自失のていで突っ立っていたが、その間に令嬢はまた椅子の上に飛び

乗ると、またもや帽子を揺すぶり始めた。みんなが手を伸ばしたので——わたしもそれに従った。

「マイダーノフさん」と令嬢は、背の高い青年に向って言った。これは痩せ^やこけた顔に、小さな眼をしよぼつかせて、黒い髪の毛をおそろしく長く伸ばした男である。——「あなたは詩人なんですから、気前のいいところを發揮して、あなたの札をムツシユ・ヴオルデマールに譲^{ゆず}って上げるべきだわ。するとこの方のチャンスは二つになって、一つじゃなくなるんですもの」

がマイダーノフは、首を横に振^ふって、長^{ちようはつ}髪をさつと揺り上げた。わたしは一番あとから手を帽子の中へ入れて、つかんで、さして札をひろげてみたが……ああ！ 途端^{とたん}にふらふらつとしてし

まった。見よ、その札には、『キス』と書いてあるではないか！
「キス！」と、わたしは思わず大声を上げた。

「ブラヴオー！ この人に当ったわ」と、令嬢がすかさず引取つて——「まあ嬉しいうれい！」——そして椅子を下りると、なんともいえず晴れやかな甘い顔つきで、じつとわたしの眼をのぞきこんだので、わたしの心臓はワツとばかり踊り立おどつた。

「あなたは嬉しくって？」と、彼女はわたしに訊きいた。

「僕？……」うまく舌が回らなかつた。

「その札は僕に売ってくれたまえ」と、突とつぜん然わたしの耳のすぐ上で、ベロヴゾーロフのがらがらした声がした。——「百ルーブル出すぜ」

わたしが軽騎兵への返事に、非常な憤慨ふんがいの一瞥いちべつをくれたので、ジナイーダは手をたたき、ルーシンは「でかした！」と絶ぜつきよう
叫さわする騒さわぎだった。

「それはそうと」と、ルーシンは続けた。——「わたしは式部官として、すべてが規定通り行われるようさいりよう 宰さい領りようせねばなりません。ムツシユー・ヴォルデマール、片かたひざ膝ひざをおつきなさい。そういう決りになっているのです」

ジナイーダはわたしの前に立つと、わたしを一層よく見ようとするかのように首を少し横にかしげ、いともそうちよう 莊しょう 重ちゆうに片手を差さ伸しのべた。わたしは眼の中が暗くなった。片膝をつこうとしたが、べったり両膝ついてしまって、おそろしく不器用くちびるに唇くちびるをジナイー

ダの指に触れたので、むこうの爪で自分の鼻さききに、かるい引つかき疵きずをこしらえてしまったほどだった。

「よろしい！」とルーシンは叫んで、わたしを助け起した。

罰金ごっこは続いていった。ジナイーダはわたしを自分のそばの席に着かせた。手を変え品を変え、実にいろんな罰金を彼女は思いついたものである！ そのうちに彼女は、『立像』をやつて見せることになったが——すると彼女は自分の台座に、醜ぶおとこ男のニルマーツキイを選び出して、うつ伏せぶに寝るねように命じたばかりか、顔を胸へたくし込ませこさせしたものである。笑い声は小やみもなしに続いた。

四角四面の地主屋敷じぬしに生おい立って、一人ぼっちの生真面目きまじめな教

育を受けてきた少年のわたしは、こうしたらんちき騒ぎや、ほとんど狂きようぼう 暴ぼうともいうべき無遠慮ぶえんりよな浮かれ気分や、見ず知らずの連中との臍へその緒切おつて初めての交際かっけやのお陰かげで、たちまち頭がカーツとなった。わたしは酒でも飲んだように手もなく酔よつぱらつてしまった。わたしがほかの誰だれよりも大きな声で、笑つたり喋しゃべつたりし始めたので、隣の部屋にいた老夫人までが、わざわざわたしを見に出てきたほどだった。夫人は、相談ごとのために呼び寄せたイヴェールスキイ門あたりの小役人と、何やら話し込んでいたのである。しかしわたしは、すっかりもう幸福感に酔いしれていたもので、誰が冷笑しようが誰が白い眼めでにらもうが、下世話げせわに言うとおおり、どこ吹ふく風で、一文の価値も認めなかった。

ジナイーダは相変わらず、わたしをひいきにして、寸時もそばから離はなさなかつた。ある罰金に当たった時、わたしは彼女と並ならんで、ひとつ絹のプラトークにくるまる羽目になったことがある。つまりわたしは、自分の秘密を彼女に打明けなければならぬのであつた。忘れもしない。わたしたち二人の頭が、突然もやもやした、半透明ほんとうめいの匂におやかな靄もやに包まれたかと思うと、その靄の中で、近々やわと柔らかに彼女の眼が光つて、ひらたい唇が熱っぽく息づき、齒がだんだん見えてきて、ほつれ毛が焼けつくようにわたしの頬ほおをくすぐつた。わたしは黙だまっていた。彼女は神秘しんぴめいた狡ずるそうな微笑びしょうを浮かうかべていたが、やがて、「ね、どうしたの？」とささやいた。わたしは赤くなつて、ふふと笑つただけで、顔をそむけ、

じつと息を殺していた。

罰金ごっこに飽あきると、——こんどは縄なわまわしが始まった。ああ！ わたしがついポカンとして、鬼おにになった彼女から、したたかピシヤリと指をぶたれたとき、なんとという法ほうえつ悦をわたしは感じたことだろう！ そのあとで、わざとわたしにポカンとした振りをしていると、彼女はわたしをじらそうとして、差伸べた両手に触れようとしなかったのだ！

我々がその晩のうちにやったことは、まだまだそれだけではなかった！ ピアノも弾ひけば、歌もうたい、踊おどりもおどれば、ジプシーの群れの真ま似ねもした。ニルマーツキイは熊くまの縫ぬいぐるみを着せられて、塩の入った水を飲まされた。マレーフスキイ伯爵は、

トランプの手品を次から次へと披露ひろうしたが、あげくの果てにカードをよく切つてから、札を四人に配る時、切札を全部わが手に収めてしまったので、ルーシンは『僭せんえつ越ながら祝辞を述べる』ことになった。マイダーノフは自作の『人殺し』という長詩の一節を朗読したが、（それはロマンテイシズムの全盛期ぜんせいきに取材してあつた）、彼はこの作品を、黒い表紙に血色の題字で、出版するつもりだと言っていた。イヴェールスキイ門からやつて来た小役人の膝から、こつそり帽子を取ってきて、その身代金みのしろぎんとしてカザーク踊りをおどらせたり、老僕ヴォニファーチイに女の室内帽をかぶせたり、———そうかと思うと、公爵令嬢が男の帽子をかぶつたり……とても一々数えきれない。ただベロヴゾーロフだけは、

眉間みけんに八の字を寄せて腹立たしげな様子で、だんだん隅すみっこへ引つ込みがちになった。……時たま彼の眼は、さつと血ばしつて、満面に朱しゆをそそぎ、今にもみんなに躍りかかつて、わたしたちを木こっ端ぱみじんに八方へ投げ飛ばしそうな劍幕けんまくを見せたが、令嬢がちらりと彼を見て、指を立てておどかすと、彼はまたこそこそ隅すみっこへ引き下がるのだつた。

しまいに、さすがのわたしたちも精こんも根も尽き果ててしまった。公爵夫人は、御自身の言い草を借りると、そんなことには一向平気しょうげんな性分しょうぶんで——どんなに騒がれようがビクともしないたちだつたが——それでもやはり疲労ひろうを覚えて、ちよつと一休み横になると言い出した。夜の十一時過ぎに夜食が出て、古いひからびた

チーズの切れっ端と、ハムを刻み込んだ妙に冷たい肉饅頭とだけだったが、それがわたしには、どんなパイよりもおいしく思われた。葡萄酒は一壺きりで、それも怪しげな、頸のところがふくれ返ったどす黒い代物で、中身はブーンと桃色のペンキの臭いがした。もつとも、誰一人それは飲まなかつた。

疲労と幸福感とでへとへとになって、わたしは傍屋から表へ出た。別れののぞんで、ジナイーダはぎゅつとわたしの手を握りしめ、またもや謎めいた微笑を浮べた。

夜気がしつとりと重く、わたしの火照った顔へ匂いを吹きつけるのだった。どうやら雷雨が来そうな模様で、黒い雨雲が湧きだして空を這い、しきりにそのもやもやした輪郭を変えていた。

そよ風が暗い木立こだちの中でざわざわと身震みふるいして、どこか地平のは
るかな彼方かなたでは、まるで独り言ひとごとのように、雷かみなりが腹立たしげな鈍にぶい
声でぶつぶつ言っていた。

裏口からこつそり、わたしは自分の部屋へもぐり込んだ。守もりや
役くの爺じいやが、床ゆかべたで眠ねむっていたので、わたしはそれをまたぎ
越こさなければならなかった。爺おやは目をさまして、わたしを見る
なり、母がまたぞろわたしに腹を立てて、またも迎むかえに人を出そ
うとしたが、父が止めたのだ、と報告した。(わたしは寢床ねじこに入
る前には、必ず母にお休みを言い、祝福してもらうことにしてい
た)が、こうなつてはもう仕方がない！

わたしは爺おややに、自分で着替きかえをして寝るからいい、と言つて

——蠟燭ろうそくを吹き消した。だがわたしは、着替えもしなければ、横になりもしなかつた。

わたしはちよつと椅子に掛けたが、それなり魔法まほうにでもかかつたように、長いこと坐すわつたままでいた。その間に感じたことは、実に目新しい、実に甘美かんびなものだった。……わたしはほんの少しあたりへ眼を配りながら、じつと身じろぎもせず坐つて、ゆつくりと息をついていた。そしてただ時々、声を立てずに思い出し笑いをしたり、そうかと思うと、『俺おれは恋こいしているのだ、これがそれなのだ、これが恋なのだ』という想念せんねんに突き当つて、胸の底がひやりとするのだった。ジナイーダの顔が眼の前の闇やみの中を静かに漂ただよっていた——漂つてはいたが、漂い去りはしなかつた。そ

の唇は相変わらず謎めいた微笑を浮べ、眼は少し横合いから物問いたげに、考え深そうに、優しげにわたしを見まもっていた……あの別れた瞬間しゅんかんとそっくりそのままの眼差まなざししだった。やがてとうとうわたしは立ち上がって、爪先つまさきだちでベッドに歩み寄り、着替えもせずに、そつと頭を枕まくらにのせた。激はげしい動作によつて、身うちに充みち満ちているものを驚おどろかしはせぬかと、それが心配でならなかったように……。

わたしは横になつたが、眼もつぶらさずにいた。まもなくわたしは、何かしら微かすかな照返しが、わたしのいる部屋の中へ、絶えず射さしては消え射しては消えするのに気がついた。……わたしは身をもたげて、窓をながめた。神秘めいてぼんやり白んでいるガラ

スの上に、窓の棧さんがくつきりと描えがき出だされている。雷雨らいふだな——
とわたしは思った。確かに雷雨らいふには違ちがいなかつたが、とても遠方
を通とつていたので、雷鳴も聞えないほどだつた。ただ、光の鈍い、
長々と尾おを引いた、枝えだに分れたような稲妻いなずまが、空にひらめいて
いるだけで、それもひらめくというよりはむしろ死にかけている
鳥の翼つばさのように、ぴくぴく震ふるえているのだつた。わたしは起き上
がつて、窓のそばへ行き、朝までそこに立ち尽つくした。……稲妻は
ほんの束つかの間まもやまなかつた。俗ぞくにいう雀の夜——つまり夏至げしごろ頃
の短か夜である。わたしは、ひっそり静まつた砂原や、ネスクー
チヌイ公園の黒々とした森もり陰かげや、鈍く稲妻がひらめくたびにや
はり震えるように見える遠い家々の黄いろっぽい正面やを、じつ

と見つめていた。……見つめたまま——眼を離すことができなかつた。そのひっそりした稲妻、その遠慮えんりよがちのひらめきが、同じくわたしの身うちにもひらめいている無言のひそやかな衝しょうど動うに、ちょうど相応ずるもののように思われた。夜が明け始めた。朝焼けがそこここに真紅しんくのまだらを散らした。日の出が近くにつれて、稲妻はだんだん淡くあわ、短くなつていった。そのわななきはいよいよ間遠まどおになつて、ついに、はつきり明けはなれた一日の、もの皆みなの夢ゆめをさます疑いもない光にひたされて消えてしまつた。

わたしの胸の中でも、やはり稲妻は消えてしまつた。わたしは非常な疲れつかと静けさを感じたが……ジナイーダの面影おもかげは相変ら

ず飛びめぐって、わたしの魂たましいの上に凱歌かいがを奏していた。ただしその面影も、いつかひとりでに安らいできたように見えた。さながら白鳥が、沼ぬまの草むらから飛び立ったように、その面影もまた、それを取巻いているさまざまみなくな醜い物陰から、離れ去ったものようだった。そしてわたしはうとうと寝入りながら、これを名残なごりにもう一遍いっぺん、信頼をこめた崇拜すうはいの念をもつて、その面影にひしとばかりとりすがった。……

おお、めざまされた魂の、つつましい情感よ、その優しい響ひびきよ、そのめでたさと静もりよ。恋の初めての感動の、とろけるばかりの悦よろこびよ。——汝いましらはそも、今いずこ、今いずこ？

八

あくる朝、わたしがお茶に下りてゆくと、母はわたしを叱しかつたけれど——思ったほどのことはなく、ゆうべどんな風にして過したかを、わたしに話をさせた。わたしは言葉少なに応答しながら、細かな点はどしどしはぶいて、全体として大いに無邪むじや気な感じを与あたえるようにつとめた。

「とにかくあの人たちは、まともな連中じゃありません」と、母は釘くぎをさした。——「だからお前も、あんなところへ出入りする代りに、ちゃんと勉強して、試験の準備をするんですよ」

わたしの勉強に対する母の配はい慮りが、わずかこの数語に尽つきて

いることは、わたしも心得ているから、別に口答えをする必要はないと思つた。ところがお茶が済むと、父はわたしと腕を組んで、
 一 緒いっしょに庭へ出て行きながら、わたしがザセーキン家で見つたことを、
 逐ちくいち一わたしに物語らせた。

父はわたしに、奇妙きみような影えいき響ようりよく力ちからを持つていたし、そう言
 えば、互たがいの關係にしたところで、やはり奇妙なものだつた。父
 はわたしの教育のことには、ほとんど風馬牛ふうばぎゆうだつたが、さりと
 てわたしを馬鹿ばかにするような真似まねは、ついぞしたことがない。父
 はわたしの自由を尊重していたばかりか、更さらに進んで、ちよつと
 妙な言い方だが、わたしに対して慇懃いんぎんでさえあつた。……ただ
 し、近くへは寄せつけてくれないのである。わたしは父を愛し、

父に見とれて、これこそ男性というものの典型だと思っていた。だから、實際の話が、わたしはもつと強く強く、父になついたはずなのだが、ただ父の手が私を押しおのけているような感じが、しよつちゆうあつて、それが邪魔じやまになつたのだ！ その代り、父さえその気になれば、ほとんど一瞬いつしゆんにして、ただの一言ひとこと、ただの一動きでもつて、父に対する無限の信頼感を、わたしの胸に呼びさますことができた。わたしは心をあげひろげて、まるで相手が聡明そうめいな友達か、親切な先生でもあるように、父とおしゃべりを始めるのだが……やがてまた不意に、父はわたしをほうり出してしまふ。——またしてもその手がわたしを押しおのける。いかにも愛想のいい、もの柔やわらかな手つきだが、とにかく押しおのける

のである。

父も時には、浮き浮きした気分になることがあつて、そうなる
と私を相手に、まるで子供ののように、ふざけたり、はねたりする
のをいとわなかつた（父は、激しい肉体の運動なら、なんでも好
きだつた）。一度——あとにも先にも唯の一度きりだが！——
父がとても優しくわたしを可愛がつてくれて、そのため危うくわ
たしが泣き出しそうになつたことがある。……しかし、その浮き
浮きした気分も、優しさも、すぐまた跡かたもなく消えて、——
現に二人の間に起つた事柄から、何かしら今後の期待を引出す
などということとは、とてもできない相談だつた。まあ何もかも、
夢で見たようなものだつたのだ。よくわたしは、父の賢そうな、

美しい、澄すみきつた顔を、じつと見ているうちに……胸がどきどきしてきて、身も心も父の方へ吸い寄せられるような気がした。……すると父は、そういう私の気持に感づきでもしたようにひよいと通りすがりに私の頬ほおをかるく叩たたいて、——それなり向うへ行つてしまふか、何か仕事をやり出すか、さもなければ、いきなり頭から足の先まで、凍こおりついたように冷たくなってしまふ。その冷たくなりようときたら、ほかの人には見られない父独特のもので、それを見せられると私はたちまち縮み上がって、やはり寒々とした気持になるのだつた。

ごく稀まれに、父は発ほっ作的さてきにわたしに好意を示しはしたが、それは決して、口にこそ出さないが一目でそれと察せられる私の哀あいが

願ねんによって、ひき起されたものではない。それは、いつも決つて、不意に起るのだった。あとになって、父の性格をいろいろ考えてみたあげく、わたしの達した結論は、父としては私や家庭生活活かえりなんぞを、顧みるひまがなかつたということである。父は、あ
る別のものを愛していて、その別のもので、すっかり堪たんのう能して
いたのである。

『取れるだけ自分の手でつかめ。人の手にあやつられるな。自分が自分みずからのものであること——人生の妙みょうしゆ趣はつまりそこだよ』と、ある時父はわたしに語った。また別の時、わたしは若き民主主義者として、父の面前で、とうとうと自由を論じ始めたことがある（父はその日は、わたしの当時の言い方でいうと

「優し」かった。そんな時には、どんな話を持ち出そうと勝手だった。

「自由か」と、父は引取って、「だがね、人間に自由を与えてくれるものは何か。お前それを知っているかね？」

「なんです？」

「意志だよ、自分自身の意志だよ。これは、権力までも与えてくれる。自由よりもっととうとと貴い権力をね。欲する——ほつということができたら、自由にもなれるし、上に立つこともできるのだ」

父は、何よりもまず、そして何にも増して、生活することを欲した。そして実際、生活したのだ。……ひよつとすると父は、自分が人生の「妙趣」をあまり永く享きょうらう楽らくできないことを予感し

ていたのかもしれない。四十二で死んだのである。

わたしは、ザセーキン家を訪問した時の一部始終を、詳しく父に話して聞かせた。父はベンチに腰掛けて、鞭の先で砂に何やら書きながら、半ばは注意ぶかく、半ばは放心のていで、わたしの話を聴いていた。父は時々笑い声を立てて、一種こう晴れやかな面おもしろ白めそうな眼つきで私の顔をちらりと見たり、ちよつとした質問やまぜつ返しで、わたしを焚たきつけたりした。初めのうちは私は、ジナイーダの名前をさえ口にする勇氣が出なかつたが、やがて我慢がなくなつて、しきりに彼女かのじよのことを褒ほめちぎりだした。父は相変らず笑い続けていたが、そのうちにふと考え込んだかと思うと伸のびをして、立ち上がった。

わたしは、父が家から出しなに、馬に鞍くらを置くように命じたのを思い出した。父の馬術はなかなか大したもので、レーリ氏などよりずっと早くから、どんな荒馬あろうまをも馴ならすのに妙を得ていた。「僕ぼくも一緒に行つていい、パパ？」と、わたしは父に訊きいた。

「いいや」と父は答えた。その顔には、例の素そつ気けない愛想のいい表情が浮うかんだ。——「乗りたけりや、一人でお行き。そして、わたしは行かないからつて、別当べつとうにそう言つとくれ」

父はわたしに背を向け、足ばやに立ち去つた。わたしが見送つていると、父の姿は門の外へ消えた。垣根かきねに沿つて、帽子ぼうしの動いて行くのが見える。父はザセーキン家へ入つて行つた。

父は、一時間以上はそこにいなかつたが、それからすぐさま町

へ出かけ、夕方やっと帰つて来た。

夕食のあとで、今度は私がザセーキン家へ行つた。客間に入つてみると、ろうこうしゃくふじん 老公爵夫人 きりしきいなかつた。わたしの姿を見た夫人は、室内帽子をかぶつた頭を、あ編み針ぼりの先で搔くと、いきなりわたしに向つて、せいがんしょ 請願書を一通清書してもらえまいかと問いかけた。

「おやすい御用ごようですとも」と、わたしは答えて、いす椅子の端はしに腰を下ろした。

「ただね、字をなるべく大きくお願いしますよ」と公爵夫人は、べつたり書き汚よごした紙を一枚わたしながら言った。——「で、今日じゆうにやって下さらなくて、ほっ坊ちゃん？」

「やりますとも、今日じゆうに」

となり

隣の部屋のドアがほんのちよつぱり開いて、その隙間に、ジナ

すきま

イーダの顔が現われた。

——蒼あおざめた、

もの思わしげな顔つきを

して、髪かみは無造作に後ろへはね返してある。大きな冷やかな両眼で、わたしをじつと見ると、またそつとドアを閉めた。

「ジーナ、これ、ジーナや！」と、老夫人が呼んだ。ジナイーダは返事をしなかった。わたしは老夫人の請願書を持って帰って、一晩じゆうそれにかかりきりだった。

九

わたしの「情熱」は、その日から始まった。忘れもしない、――その時わたしは、初めて就職した人が感じるはずの、あの一種の気持と同じものを味わった。つまりわたしは、もはやただの子供でも少年でもなくて、恋する人になったのだ。今わたしは、その日からわたしの情熱が始まったと言ったが、も一つその上に、わたしの悩みもその日から始まったと、言い添えてもいいだろう。ジナイーダがいないと、わたしは気が滅入った。何ひとつ頭に浮んでこず、何ごととも手につかなかつた。わたしは何日もぶつづげに、明けても暮れても、しきりに彼女のことを思っていた。わたしは気が滅入った……とはいえ、彼女がいる時でも、別に気が楽になったわけではない。わたしは嫉妬したり、自分の小っぽ

けき加減に愛想をつかしたり、馬鹿ばかみたいにするねてみたり、馬鹿
みたいに平へいつくばったり、——そのくせ、どうにもならない引力
で彼女の方へ引きつけられて、彼女の居間の敷居をまたぐ都度つど、
わたしは思わず知らず、幸福のおののきに総身そうみが震ふるえるのだった。
ジナイーダはすぐさま、わたしが彼女に恋していることを見抜みぬい
たし、わたしの方でも、別にそれを匿かくそうとも思わなかった。彼
女は、わたしの情熱を面白おもしろがって、わたしをからかったり、甘あま
やかしたり、いじめたりした。いったい、他人のために、その最
大の喜びや、その底知れぬ悲しみの、唯一無二ゆいいつむにの源泉になつたり、
またはそれらの、絶対至上にして無責任な原因になつたりするの
は、快いものであるが、全く私は、ジナイーダの手にかかったが

最後、まるでぐにやぐにやな蠟ろうみたいなものだったのだ。

とはいえ、何もわたしだけが、彼女に恋していたわけではなかった。彼女の家にやってくる男という男は、みんな彼女にのぼせあがっていたし、彼女の方では、それをみんな鎖くさりにつないで、自分の足もとに飼かっていたわけなのだ。そうした男たちの胸に、あるいは希望を、あるいは不安を呼びおこしたり、こっちの気の向きよう一つで、彼らをきりきり舞まいさせたりするのが（それを彼女が、人間のぶつけ合い、と呼んでいた）、彼女には面白くてならなかったのである。しかも男たちの方では、それに抗議こうぎを申し立てるところか、喜んで彼女の言いなりになつていたのだ。澆はつら刺つとして美しい彼女という人間のなかには、狡ずるさと暢のんき気さ、技ぎ

巧こうと素朴そぼく、おとなしきとやんちゃき、といったようなものが、一種特別な魅力みりよくある混り合いをしていた。彼女の言うことなすこと、彼女の身ぶり物ごしのはしはしにも、微妙びみょうな、ふわふわした魅力ただよが漂って、その隅々すみずみにまで、他人には真似まねのできぬ、ぴちぴちした力が溢あふれていた。彼女の顔つきも、しよつちゆう變つて、やはりぴちぴちしていた。それはほとんど同時に、冷笑を表わしもしれば、物思いを表わしもし、情熱かげの表情にもなるのであった。まるで晴れた風のある日の雲の陰かげのように、軽いすばしこい色とりどりの情感が、絶えず彼女の眼めや唇くちびるのほとりに、ちらついているのだった。

彼女にとって、自分の崇拜者すうはいしゃは誰だれもかれも、みんな入用な人

物だった。ベロヴゾーロフは、彼女から時によつては、『わたし
の猛獸もうじゆうさん』と呼ばれたり、時によつては簡単に、『わたし
の』と呼ばれたりしていたが、彼女のためとあらば火の中へも飛
び込みこかねない男である。自分の頭の働きにも自信はなし、ほか
にこれといった取柄とりえもないとあきらめている彼は、しよつちゆう
彼女に結婚けっこんを申込んで、ほかの男の言うことは、要するに空からね
念仏んぶつに過ぎないと、ほのめかすのであった。

マイダーノフは、彼女の魂たましいのなかにある詩的な素質のお相手をつとめていた。ほとんどすべての文士の多分に漏れもれず、彼もかなり冷たい人間だったが、それでいて自分がジナイーダを崇拜しているものと、遮しやにむに二無二相手に思い込ませようとしていたのみか、

どうやら自分でも、そう思い込もうとしているらしかった。無^{むじん}尽^{ぞう}蔵ともいふべき詩句に、彼女への讚美^{さんび}の情を託^{たく}しては、それを、どこかしら不自然でもあれば真^{しんけん}剣でもある感^{かんげき}激をもつて、彼女に朗読して聞かせる。彼女の方では、この男に共鳴する面もあり、いささかおひやかし気味でもあった。あまりこの男を信用していない彼女は、彼の真情の吐露^{とろ}もいゝ加減聞き飽^あきると、プーキシンを朗読させるのだった。それは、彼女の言い草に従えば、空気を清めるためだった。

次にルーシンは、皮肉屋で、露骨^{ろこつ}な毒^{どく}舌^{ぜつ}をふるう医者だが、彼女というものを一番よく見ており、また誰より深く彼女を愛してもいながら、そのくせ陰でも面前でも、彼女の悪口ばかり言っ

ていた。彼女は、この男を尊敬してはいたものの、さりとして決して容赦ようしやはせず、時々、一種特別な、さも小気味よげな満足の面おも持もちで、彼だつてやはり自分の手中にあるのだということ、彼に感づかせるように仕向けるのだつた。

「わたし、コケツトなのよ。人情なんかないわ。まあ、役者向きの水みづ性しょうなんだわ」と、彼女はある日、わたしのいる前で、彼に言ったことがある。——「あ、いいことがある！ さ、手を出しなさい。ピンを突つつ刺さしてあげるから。するとあなたは、この坊ぼつちゃんの手前恥はずかしいでしょうし、それに痛くもあるでしょう。でもね、あなたは笑つて見せてちようだい。いいこと、君子くんしさん」

ルーシンは赤くなつて、顔をそむけ、唇をかみしめたが、結局その手を差出した。彼女がピンを突つ刺すと、まさしく彼は笑い出した。……彼女も声を立てて笑いながら、そのピンをかなり深く刺しこんで、むなしくあちこち外ら^そそうとする彼の眼を、じつと覗^{のぞ}き込むのだった。……

ジナイーダとマレーフスキイ伯^{はくしやく}爵^{くわく}の関係が、一番わたしにはわかりにくかつた。なかなか美男子で、如^{じよさい}才^{さい}なく頭のはたらく男なのだが、しかし、ほんの十六歳^{さい}の少年にすぎないわたしでさえ、この男には何かしら油断^{ゆだん}のならぬ、うさん臭^{くさ}いところがあ
るような気がした。しかもジナイーダが、それに気づいていないのが、わたしは不思議でならなかつた。ひよつとすると彼女は、

そのうさん臭さに気づいていながら、別にそれが厭いやでなかつたのかもしれない。なにしろ教育も変則なら、つきあいや習慣も風変りだし、しょっちゅう母親はそばにいるし、家の内情は貧乏びんぼうで乱脈だし、かてて加えて、若い娘むすめの身で気まま勝手はしたい放題、それに、ぐるりの連中より一段も二段も上だという意識もあるし——というわけで、そうした一切いっさいがっさい財ざいがあわさつて、彼女のうちに、一種こう人を小馬鹿にしたような無頓着むとんじやくさや投げやりな態度を、養つたのである。何事がもちあがろうが——よしんばヴオニフアーチイが入つて来て「砂糖がきれいでした」と言ごんじよう上じやうに及およぼうが、何か忌いまわしい世間の陰口が耳に入ろうが、客の中で喧嘩けんかが始まろうが——彼女はただ、豊かな捲髪まきげを一振りして、

「くだらない」と言うだけで、けろりとしていた。

お陰でわたしは、全身の血がカツと燃え立つような思いをすることが、よくあった。たとえばマレーフスキイが、まるで狐きつねみたいに狡こつそうに肩を揺ゆすりながら、彼女のそばへ寄って行って、彼女の掛けてある椅子いすの背に、伊達だてな格好かつこうをしてもたれかかり、さも得意だいげな、追つい従しやうたらたらうすわらの薄笑うすわらいを浮うかべながら、彼女の耳みみに何かささやきだす。すると彼女は、両手を胸むねに組くんで、まじまじと彼を見つめながら、やがて自分も微笑えいごうを浮べ、首を振つたりするのである。

「あなたは、どこが好よくて、マレーフスキイさんなんかを家へ入れるのです？」と、ある時わたしは彼女かのじよに訊きいてみた。

「だって、あの人の髭ひげ、すてきじゃなくて！」と、彼女は答えた。

——「でもそんなこと、あなたの知ったことじゃないわ」

また別の時、彼女はわたしに、こう言ったことがあった。

「わたしがあの人を愛していると、あなた思っているのじゃない？
違ちがうわ。わたし、こつちで上から見下ろさなくちやならないよ

うな人は、好きになれないの。わたしの欲ほしいのは、向うでこつちを征せい服ふくしてくれるような人。……でもね、そんな人にぶつかりっこはないわ、ありがたいことにね！ わたし、誰の手にもひつかかりはしないわ、イイーだ」

「すると、決して恋をしないというわけですね」

「じゃ、あなたをどうするの？ わたし、あなたを愛していなく

「つて？」そう言うとな彼女は、手袋てぶくろの先で、わたしの鼻をたたいた。

全くジナイーダは、さんざんわたしを慰なぐさみ物にした。三週間の間、わたしは毎日彼女に会っていたが、その間に彼女がわたしに向ってやらなかったことは、何一つ、全く何一つなかった、と言っているほどだ！彼女の方でわたしの家へ来ることは、あまりなかったが、それはわたしにとって痛事ではなかった。うちへ来ると、彼女はたちまち、令嬢れいじょう——つまり公こう爵しやく令嬢に、早変わりしてしまおうし、こつちでも彼女を敬遠していた。わたしは、母に見破られるのが怖こわかったのだ。母はジナイーダに頗すこぶる悪意をいだいて、まるで仇かたきのようにわたしたちを見張っていた。父の方

は、大して怖くなかった。父は、わたしには気がつかない様子だったし、彼女ともあまり話をしなかったが、いざ話す時には、何か特別に気の利いたき、もつともらしい話しぶりをしていた。

わたしは、勉強も読書もやめてしまった。郊外こうがい散歩や乗馬までも、やめてしまった。まるで足に糸をつけられたカブト虫みたいに、わたしはなつかしい傍屋はなれのまわりを、絶えずぐるぐる回っていた。いいと言われれば、いつまでだってそこにいたはずだが……そうはいかなかった。母の小言こごともうるさいし、時には当のジナイーダから、追っ立てを食う始末だった。するとわたしは、自分の部屋へ引っこもるか、それとも庭のいちばん端まで行って、石造りの高い温室の崩れ残りへよじ登って、道路に面した壁かべから

両足をぶらさげ、何時間も坐すわつたなりで、一心に眺ながめに眺めるの
 だったが、そのくせ何ひとつ目に入らなかつた。わたしのそばに
 は、埃ほこりをかぶつたイラクサの上を、ものうげに白い蝶ちようちよう々々が飛
 びかわっていた。元気な雀すずめが一羽いちわ、少し先の、半ば割れた赤煉あかれん
 瓦がの上に止つて、絶えず全身をくるくる回し、尾おをひろげて、
 癩かんにさわる鳴き声を立てていた。相変らず疑ぐりぶかい鴉からすの群むれ
 が、すっかり葉の落ちた白樺しらかばの高い高いてっぺんに止つて、思
 い出したようにカアカア鳴いていた。太陽と風が、そのまばらな
 枝えだの間に、静かにたわむれていた。ドン修道院かたねの鐘かねの音ねが、時お
 り、穏おだやかに陰気いんきに響ひびいてきた。——わたしはじつと坐つて、見
 つめたり聞き入つたりしているうちに、何かしら名状しがたい感

じで、胸がいつぱいになるのだった。その中には、悲しみも、喜びも、未来の予感も、希望も、生の恐れも、何から何までが含まれていて、けれど当時のわたしは、そんなものは何一つわかりもせず、また、自分の中に沸々^{ふっふっ}とたぎっているすべてのものうち、どの一つだって、それと名ざすだけの力はなかつたらう。いや、いつそ、その一切をあげて、ただ一つの名——ジナイーダという名でもって、呼んだかもしれない。

ところがジナイーダは、猫^{ねこ}が鼠^{ねずみ}をおもちやにするように、相変らずわたしを弄^{もてあそ}んでいた。急にじやれついてきて、わたしを興奮させたり、うっとりさせたかと思うと、こんどは手の裏を返すように、わたしを突^つっぱなして、彼女に近寄ることも、その顔を眺

めることも、できないような羽目に落してしまふ。

忘れもしないが、彼女が二、三日ぶつ続けに、とても冷たい態度をわたしに見せたことがある。わたしはすっかり怖気おしげづいて、こそこそ彼女たちの傍屋はなれへ這はいこんでは、なるべく老夫人のそばに、くつついているようにしたものである。しかも折りも折り、夫人はひどく怒りおこっぽくなつていて、がなり散らしてばかりいたのだ。というのは、何か手形の件がうまくゆかないので、もう二度も、区の署長さんと掛け合つたところだったのである。

ある日、わたしが庭へ出て、例の垣根かきねのそばを通りかかると、ジナイーダの姿が目にとまつた。彼女は両手をわきについて、草の上に坐つたまま、身じろぎもせずにいる。わたしが、そつと遠

ざかろうとすると、彼女はいきなり首を上げてさも命令するような合図をした。わたしは、その場に立ちすくんだ。どういうつもりなのか、一度では呑みこめなかつたのだ。彼女は、もう一遍合図をした。わたしは、すぐさま垣根を飛びこえて、いそいそと彼女のそばへ駆け寄った。ところが彼女は、目でわたしを制して、彼女から二歩ほどのところにある小径を、指さして見せた。どうしたらいいのかわからず、当惑して、わたしは小径の縁にひざまずいた。見ると彼女の顔は真っ蒼で、なんとも言えず痛ましい悲哀と、深い疲れの色が、目鼻だちのくまぐまに刻まれているので、わたしは心臓が締めつけられるような気がして、思わずこう口走った。「どうかしたのでですか？」

ジナイーダは片手を伸ばして、何か草の葉をむしると、齒で噛んで、ぽいと向うへ投げた。

「あなた、わたしがとても好き？」と、やがての果てに、彼女は訊いた。——「そう？」

わたしは、なんとも答えなかつた。いまさら、なんの返事をすることがあろう。

「そう」と、彼女はなおわたしを見つめながら、繰返した。

——「そりや、そうだわね。まるで同じ眼だもの」そう言い足して、じつと考えこみ、両手で顔を隠した。やがて、「わたし、何もかも厭になつた」とささやくように言った。——「いつそ、世界の涯へ行ってしまいたい。こんなこと、こらえきれないわ、と

てもやってゆけないわ。……それに、行末ゆくすえはどうなるんだろう！……ああ、つらい。……ほんとに、つらい！」

「なぜですか？」と、わたしは、おずおず尋ねた。

ジナイーダは返事をせずに、ただ肩かたをすくめただけだった。わたしは膝ひざをついたまま、すっかり悄気しよげかえって、彼女を見まもっていた。彼女の一言一句は、鋭くわたしの胸に突き刺さった。わたしはその瞬間しゆんかん、もし彼女の悲しみが消えるものなら、喜んで命を投げ出しもしたろう。わたしは、彼女を見つめているうちに、なぜそう辛いつらのか合点がてんがゆかぬながらも、それでいて、彼女がにわかには堪たえがたい悲哀ほっさの発作おそに襲われて、庭へ出てきて、ぱったり地面に倒れた有様ありさまを、まざまざと心に描えがいていた。――

あたりは青々と、光に満ちていた。風は木々の葉なみをそよがせ、
 時おり木^{きいちご}苺の長い枝を、ジナイーダの頭上で揺^ゆすっていた。ど
 こかで鳩^{はと}が、ふくみ声で鳴き、蜜^{みつばち}蜂はうなりながら、まばらな
 草の上を低く飛びかっていた。上には空が、優^{やさ}しく青みわたって
 いるが、でもわたしは、なんとも言えずわびしかつた。……

「何か、詩を読んでちようだい」と、ジナイーダは小声で言つて、
 片^{かたひじ}肘をついた。——「わたし、あなたが詩を読むところが好き
 なの。あなたのは、まるで歌うみたいだけれど、それで結構よ、
 若々しくつていいわ。あの、『グルジヤの丘の上』を読んで。——
 ーでも、まずお座りなさいな」

わたしは腰を下ろして、『グルジヤの丘の上』（訳注 プーシ

キンがカフカーズをさまよいながら、遠い恋人を思つて作った抒情詩。その大意は、「グルジヤの丘の上、夜露かかり、アラグヴアの流れ、わが前にぎわめく。われはわびしく楽しく、わが悲しみは明るし。わが悲しみは、ただひとり君の姿にみたされて……このわびごころ、何ものの乱し騒がすものもなし。かくて胸は、またも燃え、恋いわたる……愛さでやまぬ胸なれば。」を朗読した。

「《愛さでやまぬ胸なれば》」とジナイーダは繰返した。――

「そこが、詩のいいところなのね。つまり、この世にないことを、言つてくれる。しかも、実際あるものより立派なばかりでなく、ずっと真実に近いことをまで、言つてくれるのだもの。……愛さ

でやまぬ胸なれば——ほんとに、しまいと思つても、せずにはいられないんだわ！」彼女はまた黙り込んだが、突然ぶるんと身を震わして立ち上がった、「さ、行きましよう。お母さんのところ、マイダーノフが坐り込んでいるのよ。わたしにつて、自分で作った叙事詩じよじしを持つて来てくれたのに、ほっぽらかして来てしまったの。あの人も今頃いまごろは、きつと悄氣てるわ。……でも、仕方がないのよ！ やがてあなただつて、わかる時が来るわ……ただね、わたしのこと、怒おこらないでちょうだいね！」

ジナイーダは、せかせかとわたしの手を握にぎると、先に立つて駆け出した。二人は傍屋はなれに帰つた。マイダーノフは、やつと印刷になつたばかりの自作の詩『人殺し』を朗読したが、わたしは

ろくに聞いていなかった。彼は四脚しきやくの短長格ヤンプを思いつきり声を引き引きがなり立てて、韻いんが入れかわり立ちかわり、まるで小鈴こすずのような空ろうつで騒そうぞう々しい音を立てたけれど、わたしはじつとジナイーダの顔を見たまま、彼女がついさつき言った言葉の意味を、しきりに考えていた。

さらずば、見知らぬ恋がたきが
にわかうばに君を 奪うばいゆきしや？

と、いきなりマイダーノフが鼻声でわめいた時、わたしの眼とジナイーダの眼がぶつかった。彼女は伏眼ふしめになって、顔を赤らめ

た。彼女が赤くなつたのを見ると、わたしはびっくりして、五体が冷えわたつた。わたしは、もう前々から彼女のこと^やで妬いていたのだが、じつさい彼女が誰かに恋しているという考えは、やつとこの瞬間、わたしの頭にひらめいたのである。

『さあ大変だ！　彼女は恋をしている！』

十

わたしの本当の責^{せめく}苦は、その瞬^{しゅんかん}間から始まつた。わたしは頭が痛くなるほど考えつめたり、思案を重ねたり、考え直したりしながら、勿^{もちろん}論^{ろん}でできるだけこつそりと、執念ぶかくジナイーダ

を見張っていた。彼女かのじよに或る変化が生じたことはもはや明白だった。彼女は一人で散歩に出かけて、長いこと歩き回っていた。時によると、客たちに顔を見せずに、何時間も自分の部屋に引っこもつていた。それまでは、ついぞなかったことである。わたしは突然とつぜん、ひどく目が見えだした。少なくとも、見えだしたような気がした。

『あいつじやないかしら？ それとも、いつそあいつかな？』

とわたしは、彼女の崇拜者すうはいしやの一人からまた一人へ、せわしく思いを馳せながら、胸の中で自問するのだった。なかんずくマレーフスキイ伯爵はくしやくは、（もつとも、こんなことを認めるのは、ジナイーダのため心外の至りだったが）ほかの誰だれよりも危険人物

のように、ひそかにわたしは思っていた。

わたしの炯眼けいがんは、残念ながら自分の鼻の先までしか届かず、また折角のわたしの密計も、誰ひとり瞞だましおおせることはできなかったらしい。少なくともドクトル・ルーシンは、じきにわたしの腹を見抜みぬいた。とはいえ彼かれだって、近頃ちかごろは様子が変わって、めつきり瘦やせもしたし、相変らず笑い上戸じょうごではあったものの、その笑い声は妙みょうに鈍にぶく、毒どくを含んで、短くなつたし、平生の軽い皮肉や、とつてつけたような冷笑れいしょう癖へきは、我にもない神経質ないらだちに変っていた。

「ねえ君、なんだってそうしよつちゆう、ここへやって来るんです」と彼は、ある日ザセーキン家の客間で二人きりになつた時、

わたしに言った。(令嬢^{れいじょう}はまだ散歩から帰って来^こなかつたし、夫人のがみがみ声が中二階でしていた。小間使^{けんか}と喧嘩^{けんか}していたのだ)——「若いうちにせつせと勉強しとかにやならんのに、どうしたことですか?」

「僕^{ぼく}が家で勉強してるかどうか、あなたにはわからないでしょう」とわたしは、いささか高飛車^{たかびしや}に言い返したが、たじたじの気味もないことはなかつた。

「何が勉強なものですか? そんなこと、君の頭にありはしませんよ。だがまあ、これ以上何も言いますまい……君の年頃では、まあ無理もないからな。ただし君の見当は、大いに狂^{くる}っているですよ。この家がどういう家か、それが君には見えんですか?」

「なんのことだか、わかりませんね」と、わたしは空とぼけた。

「わからないって？ そりやますますいかん。僕は義務として、

一言いちごん君に注意します。我々甲羅こうらをへた独身ものは、ここへ来て

も、さしつかえない。なんのことがあるものですか？ 我々は鍛た

錬れんができてるからびくともしないです。ところが君は、まだ皮ひ

膚ふが弱い。ここの空気は、君には毒ですよ——ほんとですとも、

うっかりすると伝染でんせんしますぞ？」

「どうしてです？」

「どうもこうもあったものですか。いったい君は、いま健康です

か？ 果してノーマルな状態にありますか？ 君がいま感じしてい

ることは、君のためになりますか、いいことですか？」

「でも、僕が何を感じてるというんです？」と、わたしは言ったが、心の中では、なるほど医者の言う通りだと思つた。

「いやいや、君は若い、まだ若い」と医者は、さもこの二つの言葉の中に、わたしに対する何かひどく侮蔑ぶべつてき的な感じが籠こめてありでもするような、そんな言いぶりで言葉を続けた。——「ごまかそうたつて駄目だめですよ。だつてまだまだ、君の心にあることは、ちゃんと顔に出ているもの、ありがたいことにね。だがしかし、こんな話をしたつて始まらない。第一この僕にしたつて、こんな所へ来るはずはないんですよ、もしも……（医者は歯をくいしばつた）……もしも、僕がこんな唐変木とうへんぼくでなかつたらね。ただ一つ、僕が不思議でならんのは、君のような頭のいい人が、自分の

すぐそばで起っていることに、どうして気がつかないんだろかな？」

「でも、何が起っているんです」と、わたしは素早く相手を受け、すつかり緊張きんちようした。

医者いしやは、妙みょうに嘲あざけるような同情の色を浮うかべて、わたしをじろりと見た。

「なるほど、僕も大したものだ」と彼は、ひとり言のように言った。——「頗すこぶるもって、この人の耳に入れとく必要のあることだ。……まあ要するに」と、そこで声を高めて、「もう一遍いっぺん言います、ここの雰ふん囲い気きは君にはよくない。君はここで、いい気持きもちになっているが、油断大敵ゆだんたいてきですぞ！ そりや温室おんしつのなかだつて、

やはりいい匂においはするが、そこで暮すわけにはゆかんですからね。
ねえ！ 悪いことは言わないから、またあのカイダーノフ先生に
戻もどりたまえ」

公爵夫人が入つて来て、齒が痛いと言者にこぼしだした。やが
てジナイーダが現われた。「そうそう」と、夫人は言い足した。

——「ねえドクトル、この子を叱しかつてやつて下さいな。一いちんち日じ
ゆう、氷水ばかり飲んでるんですよ。それが、体にいいことで
しようかねえ、胸が弱いくせに」

「なぜ、そんなことをなさるんです？」と、ルーシンが訊きいた。
「やつたら、どうなるとおっしゃるの？」

「なんですって？ 風邪かぜを引いて、死ぬかもしれませんよ」

「ほんど？ まさか？ でも、かまやしない——それが当然だわ！」

「おやおや！」と、医者はうなつた。夫人は出て行つた。

「おやおや」と、ジナイーダは口真似くちまねをして、「生きることが、

そんなに面白おもしろいかしら？ ぐるりを見回して御覧ごらんなさい。……

どう、よくつて？ それともあなたは、わたしがそれさえわから
ない、感の鈍にぶい女だと思つてらつしやるの？ わたしは、氷水を

飲むといい気持なの。だのにあなたはこんな人生が、束つかのまの満
足のために危険を冒おかしてはならないほど大事なものと、真顔まがおで
わたしに説教なさるおつもりね。——わたし、もう幸福なんかど

うでもいいの」

「つまり、その」と、ルーシンが皮肉った。——「気まぐれと自分勝手。……この二語にあなたは尽きるんですな。あなたという人は、全部この二語のうちにありますよ」

ジナイーダは、神経質に笑い出した。

「証文の出しおくれよ、ドクトル先生。案外、目が利きかないのねえ。だいぶ手おくれだわ。眼鏡でも、おかけになったら？ わたし今、気まぐれどころじゃないの。あなた方をからかったり、自分を笑いものにしたり……そんなこと、何が面白いものですか！

自分勝手だとおっしゃるけれど……ね、ヴォルデマールさん」

と、そこで突然ジナイーダは方角を変えて、小さな足をトンと鳴らした。——「そんな憂鬱ゆううつな顔をしないでよ。わたし、人に同

情されることなんか大嫌いだいきら」

彼女は足早に出て行つた。

「君には毒だ。全く毒だよ、ここの空気は、ねえ君」と、またル
ーシンはわたしに言つた。

十一

その晩、ザセーキン家には常連が集まつた。わたしもその中に
いた。

話がマイダーノフの例の詩のことになると、ジナイーダはしん
からそれを褒めちぎつた。

「でも、よくつて？」と、彼女かのじよはマイダーノフに言った。――

「もし、わたしが詩人だったら、もつとほかのテーマでゆくわ。

こんなこと、馬鹿ばかげた話かもしれないけれど、でもわたし時々、妙な考みようえが頭に浮うかぶのよ。ことに夜明け方、空がバラ色や灰色になつてくる頃ころ、眠ねむれずにいるような時にね。わたしなら、そうねえ……。こんなこと言つて、あなた方がた笑わかないこと？」

「いいや、とんでもない！」と、わたしたちは異口同音いくどうおんに叫さけんだ。

「わたしならね」と彼女は、両手を胸むねに組くんで、眼めをわきの方へそそぎながら、言葉ことばを続つけた。――「若い娘むすめが大勢おおぜい、夜中に、

大きな舟ふねに乗のつて――静かな河がに浮うんでいるところ、それを書くわ。月つきが冴さえている。そして娘むすめたちは、みんな白い着物きものを着きて、

白い花の冠かんむりをかぶつて、歌っているの。そうね、何か聖歌のようなもの」

「わかります、わかります。それから？」と、思わせぶりな空想的な調子で、マイダーノフが言った。

「すると不意に——岸の上に、ざわめきや、高笑いや、松たいまつ明や、手太鼓てだいこがあらわれるの。……それは、バツカスの巫女みこが群れむをなして、歌ったり叫んだりして走ってくるのよ。まあ、この光景を写すのは、あなたにお任せするわ、詩人さん。……ただわたしの注文は、松明は真つ赤で、しかももうもうと煙けむりをふいていること。それから、巫女たちの眼が、花の冠の陰かげでキラキラ光つて、花の冠は黒つぽくしたいわ。虎とらの皮や、杯さかずきも、忘れないでちょうだい。

——それに金きんだわ、金をどっさりね」

「その金は、いったいどこに使うのです？」と、マイダーノフは、平べったい髪かみの毛けを後ろへ払いながら、鼻の穴をひろげて訊きいた。「どこにですって？ 肩かたにも、腕うでにも、足にも、どこもかしこもよ。古代の女は、くるぶしに金の輪をはめていたというじやありませんか。そこで巫女たちは舟の娘たちを呼ぶの。娘たちの歌ごえが、ぱったりやまる。——もう聖歌どころじやありませんものね。でも娘たちは、そのままじつと身じろぎもしないの。河の流れに押おされて、舟はだんだん岸へ寄つて来ます。すると突とつ然ぜん一人の娘が、そつと立ち上がるのよ。……このところは、よく描び写ようしやしなければいけないわ。月の光を浴びて、その娘が静かに

立ち上がるところや、ほかの友達がびっくりする有様をね。……で、その娘が舟ばたをまたぐと、巫女たちはワツとそれを取りかこんで、真つ暗な夜闇よやみの中へ、さらって行ってしまふの。……ここは、煙が渦うずを巻いて、何もかもごっちゃになってしまふところを書くのよ。聞えるのは、巫女たちのキャツキャツいう声ばかり。そして、その娘の花の冠が、ぽつんと岸に残っているの」

ジナイーダは口をつぐんだ。（『ああ！ 彼女は恋こいに落ちたのだ』と、わたしはまた考えた）

「それだけですか？」と、マイダーノフが訊いた。

「それだけよ」と、彼女は答えた。

「それだと、大がかりな、叙事詩じよじしのテーマにはなりかねますな」

と、さも勿^{もつたい}体らしく彼^{かれ}は指摘^{してき}した。——「しかし、叙情詩^{じょじょうし}の材料として、あなたのイデーを頂くとしましょう」

「ロマンティックなものですか？」と、マレーフスキイが訊いた。
「もちろん、ロマンティックなものです。バイロン風のね」

「が、僕^{ぼく}に言わせると、ユーゴーはバイロンよりもいいですね」
と、若い伯^{はくしやく}爵^{なげ}は何気なく口ばしつた。——「面白^{おもしろ}い点でも上です」

「ユーゴーは第一流の作家です」と、マイダーノフは答えた。——
「で、僕の友人のトンコシエーエフも、自作のイスパニア物語
『エル・トロバドール』のなかで……」

「ああ、それ、あの疑問符^{ぎもんぷ}が逆立ちしている本なのね？」とジナ

イーダが遮さへぎった。

「そうです。イスパニアでは、ああ書くことになっているんですよ。そこで僕の言いかけたのは、トンコシエーエフが……」

「おやおや！ またあなた方の、古典主義だ浪ろうまん漫主義だという議論が、始まるのね」と、またもやジナイーダは彼を遮った。――

「それより、何かして遊ばない？……」

「罰ばつきん金ごっこですか？」と、ルーシンが受けた。

「いやだわ、罰金ごっこは退たいくつ屈よ。比べごっこがいいわ」（この遊びは、ジナイーダが自分で考え出したものだった。何か一つ物を決めておいて、みんなでそれに似た何か別のものを考える。

いちばんうまい比較ひかくを考えついたものが、褒美ほうびをもらうのである）
彼女は窓へ歩み寄った。日は沈しずんだばかりだった。空には、はるか高く、細長い赤い雲が幾筋いくすじも浮んでいた。

「あの雲は何に似ていて？」と、ジナイーダは訊いて、わたしたちの答えを待たずに、自分で、

「わたし、あの雲は、クレオパトラがアントニーを迎えに行つたとき、その金塗きんぬりの船に張つてあつた緋色ひいろの帆ほに似ていると思うわ。ねえ、マイダーノフさん、あなたこの間、その話をして下さったわね？」

わたしたちはみんな、『ハムレット』の中のポローニアスよろしく、いかにもあの雲はその帆ほに似ている、これ以上うまい比較

は誰にも見つかるまい、と決めてしまった。

「でもその時、アントニーは幾つだったのかしら？」と、ジナイダが訊いた。

「そりや、きつと青年だったに違いないですよ」と、マレーフスキイが口を入れた。

「そう、若かったですな」と、自信たつぷりでマイダーノフが裏書きした。

「失礼ですが」と、ルーシンが大きな声を出した。——「もう四十を越していましたよ」

「四十を越して」とジナイダは、すばやく一瞥を彼にくれて、鸚鵡返しに言った。

わたしは、まもなく家に帰った。

『彼女は恋に落ちた』と、我ともなく、わたしの唇はささやいた。

……『だが、いったい誰に？』

十一

日がたつにつれて、ジナイーダは、いよいよますます奇妙な、
 えたいの知れない娘むすめになっていった。ある日、わたしが彼女の
 部屋へ入って行くと、彼女は籐椅子とういすにかけて、頭をぎゅつと、テ
 ーブルのものがつた縁ふちに押しつけていた。はつと彼女は身を起した
 が……見れば顔じゆうべつたり、涙なみだにぬれていた。

「まあ、あなただったの？」と、彼女は薄情な薄笑いを浮かべて言った。——「こつちへいらつしやい」

わたしがそばへ行くと、彼女は片手をわたしの頭にのせて、いきなり髪かみの毛けをつかむと、ぎりぎり捻ねじ回し始めた。

「痛い……」と、やがてわたしは音をあげた。

「おや！ 痛いって！ じゃ、わたしは痛くないの？ 痛くないって言うの？」と、彼女は鸚鵡おうむがえ返しに言った。

「あら！」彼女は、わたしの頭から、ほんの一ふさ、髪かみの毛けをむしり取ったのに気がつくのと、いきなり大声をあげた。——「大変なことをしてしまつたわ！ 許してね、ヴォルデマールさん！」

彼女は、むしり取った髪かみの毛けを丁寧ていねいにそろえると、自分の指

に巻きつけて、小つちやな輪ちに編あんだ。

「わたし、あなたの髪の毛をロケツトに入れて、いつも身につけているわね」そう言った彼女の眼めには、相変らず涙が光っていた。——「それで少しは、あなたの気なぐさも慰むかもしれないわ。……じや、今日はこれでね」

わたしが家に帰ってみると、不愉快なことが待ち構えていた。

母が父を相手に言い合いをしていたのである。母が何やらしきりに父をなじると、父の方は例の調子で、冷やかで慇いんぎん懃ちんもくな沈黙をまもっていたが、まもなく外へ出て行った。わたしには、母が何をまくし立てていたのか、聞えなかったし、それに、そんな心のゆとりもありはしなかった。ただ一つ覚えているのは、言い合

いが濟すんだあとで母がわたしを居間へ呼びつけて、わたしがしげしげと公こう爵しゃく夫ふじん人のところに入いりすることについて、大いに不満の意を表し、あれはユヌ・ファム・カパーブル・ド・トゥーどんな卑ひしいこともしかねない女のしだと、罵ののつたことである。わたしは母のそばへ寄よつて、身をかがめてその手にキスすると（これは会話を打切ろうと思う時の、わたしの常じょう套とう手段しゅんだった）、そのまま自分の部屋へ戻もどつた。

ジナイーダの涙で、わたしはすっかり動転とつぜんしてしまった。わたしは、いったいどう考えたらいいものか途方とほうに暮くれて、こっちが泣き出さんばかりだった。年こそ十六になっていたけれど、わたしはまだほんの赤あかん坊ぼうだったのである。もうマレーフスキーのことなどは、念頭になかった。ただしベロヴゾーロフは、日増しに

だんだん殺気だつていつて、この油断のならない伯爵を、まるで狼おおかみが羊をねらうような目つきで睨にらんでいたが、わたしときたらもう、何事も、誰だれの事も、てんで考えなかつた。わたしは、ただぼんやりと空想にふけて、人目のない寂さびしい場所ばかり求めていた。とりわけ気に入ったのは、あの崩くずれ落ちた温室だつた。わたしはよく、その高い堀へへよじ登つて、腰こしを下ろし、いつまでもじつと坐すわつていた。その自分の姿が、いかにも不幸で孤独こどくで侘わびしげな一個の若者といつた格かっこう好なので、しまいには、我と我が身がいじらしくなつてくるのだつた。そして、そうした悲哀ひあいに満ちた感覚が、なんとも言えず嬉うれしかったのだ。わたしはそれに夢むちゆ中ちゆうになつていたのだ！ ……

さて、ある日、わたしは塀の上に坐つて、遙かかなたに眺め入りながら、鐘の響きに耳をすましていたが……その時不意に、何ものか、わたしの身をかすめて過ぎたものがあつた。そよ風かと思えば、そよ風でもない。さりとして、身震いでもなく、いわばそれは何かの息吹きか、それとも誰かが近づいてくる気配とでも言うか、そんな感じであつた。……わたしは視線を落した。すぐ下の道を、軽やかな灰色がかつた服を着て、バラ色のパラソルを肩にして、急ぎ足でジナイーダが歩いていた。彼女はわたしに気がつくど、立ち止つて、麦藁帽子の縁を押し上げ、ビロウドのような眼でわたしを見上げた。

「そんな高いところで、何をしてるの？」彼女はなんだか異様な

微笑びしょうを浮べて訊きいた。「そうそう」と、すぐまた言葉が続けて、「あなたはいつも、わたしを愛しているとおっしゃるわね。——そんならここまで、この道まで、飛び下りてごらんなさい。もし、本当にわたしを愛しているのなら」

ジナイーダが、終りまで言い切らぬうちに、わたしは後ろから誰かに小突こづかれでもしたように、早くも下へ身をおどらしていた。塀の高さは三、四メートルほどであった。わたしは両足が地面に届いた拍ひょうし子に、はずみがあんまり強すぎたので、体を支えきれなかった。わたしはどきりと倒たおれて、一瞬間、気が遠くなった。やがて我に返ったわたしは、眼をあげないのに、すぐそばにジナイーダのいることがわかった。

「可愛いわたしの坊や」と彼女は、わたしの上にかがみ込みながら言っていた。その声には千々に乱れた情愛の響きがあつた。――「どうしてあんたは、こんなことができたの、どうしてわたしの言うことなんか、きく気になつたの。……わたしだって、こんなに愛してるのに。……さ、お起き」

彼女の胸は、わたしの胸のすぐそばで息づき、その両手は、わたしの頭を撫でていた。すると、突然――その時なんというところが、わたしの身に起つたのだろう！ 彼女の柔らかなすがすがしい唇が、わたしの顔じゆうを、キスでおおい始めたのだ。……やがては、わたしの唇にも触れたのだ。……だが、そこでジナイーダは、わたしの顔の表情からして、相変らず眼を上げずにはい

るものの、もうわたしが意識を取戻したことを察したものと見えて、素早く身を起すと、こう言い放った。――

「さ、起きるのよ、向う見ずなお茶目さん。こんな埃の中に、いつまで寝ているつもり？」

わたしは起き上がった。

「パラソルを取ってちょうだい」と、ジナイーダは言つて、――

「まあわたし、あんな所へ放り出してしまったわ。だめ、そんなにわたしの顔を見ちや。……なんてお馬鹿さんなの、あなたは？」

どこか怪我しなかったこと？ イラクサに刺されて、ちくちくしやしなくつて？ そう言っているのよ、わたしの顔を見ちやいけないって。……まあ、この人ったら、なんにもわからないんだ

わ、返事ひとつしやしない」と彼女は、ひとり言のように言い添そえた。——「早くうちへお帰りなさい。ヴォルデマールさん。そして、奇麗きれいにしなさい。わたしのあとから、のこのこついて来たりしたら、承知しないわよ。そんなことをしたら、もう二度と再び……」

彼女は、終りまで言いきらずに、さつさと向うへ行つてしまい、わたしは道に坐りこんだ。……足がいうことをきかないのだ。イラクサに刺された手がひりついて、背中はずきずきするし、頭はくらくらしていた。でも、その時わたしが味わったような至福の感じは、わたしの生しょうがい涯がいにもはや二度と再び繰くり返かえされなかつた。それは甘美かんびな苦痛をなして、わたしの五体に宿っていたが、

やがて法悦ほうえつはついに堰せきを切つて、わたしは踊り上がったたり、わめき立てたりした。全く、わたしはまだほんの赤ん坊だったのだ。

十三

その日は一いちんち日じゆう、わたしは堪たまらないほど浮うき浮うきと誇ほこらかな気持ちだった。のみならず、ジナイーダのキスの感かん触しよくも、顔一面にありありと残っていたので、わたしは興奮みぶるに身震いしながら彼女の言葉を一つ一つ思い浮べたり、自分の思いがけない幸福を、胸の底で愛めでいつくしんだりしていた。それで、現にそうした新しい感覚の源をなした当の彼女かのじよに会うのが、むしろ怖おそろ

しくなつて、できることなら会いたくない、と思つたほどであつた。もうこの上、何ひとつ運命から求めてはいけない、今こそ『思いつきり、心ゆくまで最後の息をついて、そのまま死んでしまえばいいのだ』と、そんな氣持がした。

そのむくいには、てきめんで、あくる日わたしは傍屋へ出かける道々、ひどい当惑を感じた。それは、自分こそ秘密を守れますぞと、他人に見せつけたがつている人間に通有の、控え目な磊落の仮面などでは、とても匿しおおせるものではなかつた。ジナイーダはいささかの心の乱れも見せず、すこぶる無造作にわたしを迎えたが、ただ指を一本立てて脅かす真似をして、どこか青あざはできなかつたかと訊いた。わたしの折角の控え目な磊落さ

も、ものものしい態度も、その瞬間しゅんかんに消しとんでしまったばかりか、それと一緒にいっしょに、うじうじした当惑の感じもなくなった。勿論もちろんわたしは、何も特別なことを期待していたわけではないが、とにかくジナイーダの落着きはらった態度にぶつかって、まるで頭から冷水を浴びせかけられたような体ていたらくだった。自分は、この人の目から見ればほんの赤ん坊あかぼうなのだ——と、わたしはしみじみ思い知って、ひどく辛いつらい気持ちがしてきたのだ！ ジナイーダは部屋のなかを行ったり来たりしていたが、わたしの顔を見るたびごとに、素早いすばや微笑びしょうを浮べてみせた。とはいえ、彼女の思いがどこか遠くにあることは、わたしにはありありと見て取られた。

……

『いつそ、自分の方から、昨日の話を持ち出してみようか』と、わたしは考えた。——『あんなに急いで、いったいどこへ行つたのか、それを訊いて、すっかり泥を吐かせてしまおうか。……』とは思ったものの、わたしはただ片手を振っただけで、隅の方に腰を下ろした。

ベロヴゾーロフが入つて来た。彼が来たので、わたしは嬉しかった。

「実は、あなたの御用に立つようなおとなしい馬が、まだ見つかりませんでね」と彼は、^{かれ}つつけんどんな声で言った。——「フライタークのやつが、きつと一頭だけ受けあつたと言うのですが、どうも信用できません。危ないものですよ」

「なぜ危ないなんて、お思いになるの」と、ジナイーダは訊いた。

——「うかが伺いたいもんだわ」

「なぜですって？ だってあなたは、馬の心得がないじゃないですか。ひよつとして、どんなことがもちあがるか、わかりませんからねえ！ だがそれにしても、急に馬に乗ろうなんて、えらい気まぐれを起されたものですねえ」

「ふふ、それはわたしの勝手よ、親愛なる もうじゆう 猛獣さん。そんな

わけでしたら、わたし、ピョートル・ヴァシーリエヴィチに願いますわ。……」（わたしの父は、ピョートル・ヴァシーリエヴィチという名だった。わたしは、彼女が父の名をさも気軽に、楽々と口にするのにびっくりした。まるで父ならば、いつでも彼女

の御用命に応ずるように、響ひびいたからである)

「おやおや」と、ベロヴゾーロフがやり返した。——「あなたは、あの人と一緒に遠乗りなさるおつもりでしたか」

「あの人とだろうと、ほかの人とだろうと、あなたの知ったことじゃなくてよ。ただ、あなたではないことは、はっきりしているわ」

「僕ぼくではない」と、ベロヴゾーロフは鸚鵡おうむがえ返しに——「どうぞ御随意ごずいに。まあいいです。とにかく馬は、手に入れて差上げますよ」

「でも、よくつて、牛みたいなのをろくさしたのだったら、願ひ下げよ。よく申上げときますけど、わたしはギャロップで飛ばした

いのよ」

「ギャロツプも結構でしょう。……でもそれは、マレーフスキイとですか？ え、誰だれとなんですか？」

「おや、あの人とじゃいけなくって、軍人さん？ まあ安心してちょうだい」と、彼女は言い添そえた。——「あんまり目に角かどを立てないでね。あなたとも一緒に行くつもりよ。あなただつて知ってるでしょう、——マレーフスキイなんて、今じゃわたしにや、び、びーだわ！」そう言つて、彼女はかぶりを振つた。

「そんなことをおつしやるのは、僕の気休めのためですな」と、ベロヴゾーロフはふてくさつた。

ジナイーダは眼めを細めた。

「そんなことが気休めになるの？　おやまあ、あきれた軍人さんだこと！」と、彼女はやがての果てに、ほかの言葉が見当らないような調子で、そう言った。——「で、ヴォルデマールさん、あなた、わたしたちと一緒にいらっしやる？」

「僕は苦手なんです……大勢おおぜいの人前へ出るのは……」とわたしは、眼を上げずにつぶやいた。

「あなたは、テータ・テート差向さむかひいの方がいいのね？……いいわ。自由な者には自由を、救われた者には……天国を与えよだわ」と彼女は、ほつと溜息ためいきをついて言った。——「よくつて、ペロヴゾーロフさん、ひとはだぬ一肌脱ひとだぬいでちようだいね。わたし馬うまは、明日要あしたいるんですから」

「でもね、お金はどこから入るの？」と、公爵夫人こうしゃくふじんが、口を入れた。

ジナイーダは眉まゆをしかめた。

「お母様に出して頂くとは言やしないわ。ベロヴゾーロフさんが一時た立て替かえて下さるわよ」

「立て替えて下さる、立て替えて……」と、公爵夫人はぼそぼそ言ったが、突とつ然ぜん、声を限りにわめき立てた。——「ドウニヤーシカや！」

「ママ、呼よ鈴りんがあげてあるじゃないの」と、令れい嬢じょうが注意した。

「ドウニヤーシカや！」と、老夫人はまたどなった。

ベロヴゾーロフは別れを告げた。わたしも一緒に帰った。ジナイーダは、わたしを引留めなかった。

十四

あくる朝、わたしは早く起きて、庭の木で杖を一本作ると、城門の外へ出て行った。ちよつと散歩をして、うさ晴らしをしてやれ、と思つたのである。からりと晴れた日で、日ざしは明るかつたが、暑いほどではなかつた。快いさわやかな風が、地上をさまよつて、あらゆるものをそよがせながら、しかもざわつかせるほどではなく、適度にさやさやと戯たわむれていた。わたしは長いこと、

山や森を歩き回った。わたしは自分を、幸福だと思っていたわけではない。現に家を出た時も、思うさま憂愁ゆうしゆうにひたりに行くつもりだったのである。——ところがやがて、青春や、ほがらかな天気や、さわやかな空気や、さっさと歩く快さや、茂しげった草の上うへにひとり身を横たえる酔よい心地ごこちや——そうしたものの方が勝ちを占めてしまった。あの忘れられぬ言葉のふしぶしや、あのキスの雨の思い出が、またもやわたしの胸にこみあげて来た。とにかくジナイーダは、わたしの思い切った勇敢ゆうかんな振舞ふるまいを正當に認めずにはいられないのだ——と、そう思うと愉快ゆかいだった。……

『あの人の目には、ほかのやつらの方が、立派に見えるのだ』と、わたしは考えた。——『なあに、かまうもんか！ その代り、や

つらはただ、やりますと言うだけだが、僕は、見事やってのけたんだからな！ それにあの人のためなら、まだまだどえらいことをやって見せられるんだからな』

いろんな空想が、働き始めた。わたしは、自分が彼女を敵の手中から救い出す有様や、血まみれになった自分が彼女を牢屋から奪い出す光景や、そしてとうとう彼女の足もとで死ぬ場面を、次々に心に描き出した。わたしは、うちの客間にかかっている絵を思い出した。それは、マレク・アデルがマテイルダを奪い去るところだった、——ちようどその途端に、まだらな大きなキツツキが現われて、ほっそりした白樺の幹をせかせかと登り始めたので、すっかりそのほうに気を取られてしまった。キツツキが

幹の陰^{かげ}から、心配そうな顔を右に左にのぞかせる格^{かっこう}好^{こう}は、コン
トラバスの首の陰から楽師が首をのぞかせる様子にそっくりだっ
た。

それからわたしは、『白き雪にはあらねども』を歌い出したが、
それがやがて、その頃^{ころ}はやっていた『そよ風ふけば、われ君を待
つ』という歌謡^{かよう}にかわり、しばらくするとわたしは大声で、ホミ
ヤコーフの悲劇のなかの、星に呼びかけるエルマークの言葉を朗
読し出した。そうかと思うとまた、多情多感な一編の詩を作ろう
と野心を起して、全編の結句になるべき一行をさえ思いついた。
それは、『おお、ジナイーダ！ ジナイーダ！』という句だった
が、結局ものにならなかった。

そうこうするうちに、そろそろ昼飯の時刻になった。わたしは谷間へ下りて行つた。細い砂の小道が、谷間をうねつて、町へみちびいていた。わたしは、その小道を歩き出した。……ふと、何んびき
匹か馬の蹄の音が、後ろから鈍く響いてきた。わたしは振返ると、思わず立ち止つて、ひさしのついた帽子をぬいだ。父とジナイーダの姿を、みとめたからである。二人は並んで馬を歩ませていた。父は何やらしきりに彼女に話しかけながら、胴体をすつかり彼女の方へ傾け、片手を馬の首についていた。父は微笑を浮べていた。ジナイーダは、きつと眼を伏せ、唇を噛みしめて、黙つて父の言葉に耳を傾けていた。わたしがまず目にしたのは、この二人だけだったが、やがてすぐその後を追つて、谷の曲り角

から、ペロヴゾーロフの姿がぬつと現われた。外套がいとうのついた軽けい騎兵いきへいの軍服を着て、泡あわをふいた黒馬に乗っている。駿馬しゅんめは首を振り振り、鼻息を立てて、踊りおどはねている。乗り手は、手綱たづなを引いたり、拍車はくしゃを当てたり、大騒おおさわぎだ。わたしは、わきへよけた。父は手綱を引いて、ジナイーダから身を離はなし、彼女は静かに父を見上げた。——そのまま二人は、駆かけ去ってしまった。：ペロヴゾーロフは、サーベルをがちやつかせて、まっしぐらにそのあとを追った。

『あいつ、蝦えびみたいに赤くなってる』と、わたしは心に思った。

——『それにひきかえ、なぜ彼女はあんなに青いんだろう？ 朝
いっばい馬を乗りまわしたくせに——青い顔をしているとは？』

わたしは歩みを二倍ほども早めて、やっと昼飯のまにあつた。

父はもう服を改め、顔を洗つたあとのさつぱりした気色きしよくで、母

の肘掛椅子ひじかけいすのそばに腰こしを下ろして、持ち前のなだらかな響きのい

い声で、『討論新聞』の雑録欄ざつろくらんを読んでいた。母

の方は、あまり身を入れずに聞いていて、わたしの姿を見ると、

一日いちんちどこへ雲くも隠かくれていたのかと尋たずねた。かてて加えて、ど

この馬の骨だか知れないような相手と、わけのわからない場所を

うろつくのは、だい嫌きらいだよと言ひ足した。でも僕は、一人で散

歩していたのですよ——と、わたしは答えようとしたが、ふと父

の顔をうかがうと、なぜか黙つてしまった。

十五

それから五、六日というもの、わたしはほとんどジナイーダに
会わなかつた。彼女かのじよは、体のぐあいが悪いと言つていたが、そ
れでも傍屋はなれの常連が入れ代り立ち代り、彼らかれのいわゆる『当直』
にやってくるのは、一向さしつかえなかつた。ただ一人例外はマ
イダーノフで、彼は感激かんげきする機会がなくなると、たちまち氣落
ちがして、悄氣返しよげかえつてしまった。ベロヴゾーロフは、軍服のボ
タンをきちんとかけて、真つ赤な顔をして、不機嫌ふきげんに隅すみの方に坐すわ
っていた。マレーフスキイ伯爵はくしやくの華奢きゃしゃな顔には、なんだか
不氣味びしよな微笑びしよが、絶えず漂ただよっていた。彼は今や、まさしくジナ

イーダの寵愛ちようあいを失つたので、老夫人に取入ろうと格別の勉べんれ
 励いぶりを示し、貸馬車で夫人のお供ともをして、総督そうとくの所へ出か
 けさえした。もつとも、この遠征えんせいは失敗に終つたのみならず、
 マレーフスキイは厭いやな目にまであわされた。総督は逆手さかてをとつて、
 彼がいつぞや土木局の連中を相手にもちあげたさる醜聞しゆうぶんを、
 わざわざ言い出したので、彼は弁明これ努めて、何分なにぶんにもあの
 頃ころはまだ未経験こころだったので——と、かぶとを脱ぬがざるを得なかつ
 た。

ルーシンは、日に二度ぐらいやって来たけれど、長居はしなな
 った。わたしは、この間の言い合い以来、この男がいささか煙けむた
 くなつたと同時に、しん底から彼に惹ひきつけられるような気持も

していた。彼はある日、わたしと一いっしょ緒にネスクーチヌイ公園へ散歩に出かけたが、その時はひどく親切で愛想がよく、いろんな草や花の名前や特性を教えてくださいましたが、やがて突然とつぜん、それこそ薮やぶから棒に——額をびしやりと叩たたいて、こう叫さけんだ。

「ああ、俺おれは馬鹿ばかだよ。あの人のことを、ただのコケツトだと思つてたのだからなあ？ どうやらこの世の中には、自分を犠牲ぎせいにすることが楽しいような連中も、あるものと見えるなあ」

「それは、なんのことですか」と、わたしは訊きき返した。

「いや、君には何も話したくないですよ」と、吐はき出すようにルーションは答えた。

ジナイーダは、わたしを避さけていた。わたしの顔が見えると――

—これはわたし自身、いやでも気づかざるを得なかったのだが—
—彼女は厭な気持がするらしかった。彼女は無意識に、わたしから顔をそむけた……無意識にである。それがわたしには実に辛く、身を切られるような思いだった！ しかし、どうにも仕方がないので、わたしはなるべく彼女の目に触れないようにして、ただ遠くから彼女を見張っていることにしたが、これまた、いつもうまくゆくとは限らなかった。彼女には相も変わらず、何やら不可解なことが起りつつあった。すっかり面おもがわ変りがして、何かから何まで、まるで別人のようになってしまった。

なかでも、彼女に生じた変化が格別わたしの胸を打ったのは、ある暖かい、静かな日暮れのことであった。わたしは、枝えだをひろ

げた一叢ひとむらのニワトコの陰かげの、低いベンチに腰掛こしかけていた。わたしは、この場所が好きだった。ジナイーダの部屋の窓が、そこから見えたからである。わたしが坐すわつていると、頭の上の、すっかり暗くなった茂しげみの中で、小鳥が一羽いちわしきりにかきこそいわせていた。灰色の小猫こねこが、背中をまっすぐ伸ばのして、そつと庭しのへ忍しのび込んだ。すでに明るくはないけれど、まだ透すいて見える空気のかを、先陣せんじんのカブト虫たちが、重々しい唸うなりを立てて飛んでいった。わたしは坐すわつたまま窓を眺ながめ、いつか開きはしまいかと待ち受けていた。果して、窓は開いて、ジナイーダが姿を見せた。白い服を着ていたが、彼女自身も、顔から肩かた、そして両手まで、真っ白なほど青ざめていた。彼女は長いこと、身じろぎもせず、

ひそめた眉まゆの下から、じつとまっすぐ前を、いつまでも見つめていた。そんな目つきをする彼女を、わたしはついぞ見たこともなかつた。やがて彼女は、両手をかたくかたく握にぎりしめ、それをまくちびるず唇へ、それから額へ持つていったが——そこで、突然ぱつと指をひろげると、両の耳から髪かみの毛を払はらいのけ、さつと一振り髪ひとふを振上げたかと思うと、何か決心がついたといったふうには、頭を上から下へ大きくうなずかせ、ぱたんと窓を閉めた。

三日ほどしてから、わたしは庭で彼女に出会った。わたしがわきへ避けようとする、彼女の方で引止めた。

「手を貸してちょうだい」と、彼女は、以前の情愛のこもった調子で言った。——「わたしたち、長いことおしやべりをしなかつ

たことね」

わたしは彼女の顔をうかがった。その眼は静かに光って、顔は、まるで靄もやをとおして見るように、ほほ笑えんでいた。

「まだずっと、お加減が悪いのですか」と、わたしは尋たずねた。

「いいえ、もうすっかりいいの」と彼女は答えて、小さな紅あかいバラを一輪摘つみ取った。——「すこし疲つかれているけれど、これもじきに直るわ」

「で、また元通りのあなたになって下さるんですね？」と、わたしは訊いた。

ジナイーダは、バラを顔へ近づけた。すると、あざやかな花びらの照返しが、彼女の頬ほおを染そめたように思われた。

「ほんとに、わたし変ったかしら？」と、彼女は訊き返した。

「ええ、変りました」と、わたしは小声で答えた。

「わたし、あなたに冷たくしたわ——それは自分でもわかってるの」と、ジナイーダは言い始めた。——「けれど、あなたがそれを気にすることなんか、なかったのよ。……わたし、外に仕方がなかったんだもの。……でも、こんな話をしても始まらないわ！」

「あなたは、僕ぼくがあなたを愛するのが厭なんです——それなんです！」と、わたしは思わずカツとなつて、陰気いんきな調子で叫んだ。

「いいえ、愛してちょうだい。けれど、前のようにはなしにね」「というと？」

「お友達になりましょうね——それがいいのよ！」ジナイーダは、わたしにバラの花を嗅がせて、——「ね、よくって、わたしあなたよりずっと年上なんだから——叔母さんおばにだってなれるはずよ、ほんとに。また、叔母さんでないまでも、姉さんになら立派になれるわ。そこであなたは……」

「僕は、どうせ赤ん坊あかぼうですよ」と、わたしは遮さへぎった。

「ええ、そう、赤ちゃんね。けれど、可愛らしい、おとなしい、利口な子だから、わたし大好きなのよ。ああ、そうそう、こうしたらいいわ。わたし、今日からあなたを、わたしのお小姓こしやうに立ててあげるわ。そこで、お小姓ごしゆじんというものは、御主人ごしゆじんのそばを離はなれてはいけないということを、忘れてはいけませんよ。さ、

これが、あなたの新しい位のしるし」と、彼女は言い足して、わたしの短い上着のボタンに、バラの花を挿さしてくれた。——「わたしの御寵愛のしるしよ」

「僕は前には、もっと別の寵愛を受けていましたよ」と、わたしは口をとがらした。

「まあ！」と、ジナイーダは言つて、横合よこあいからわたしの顔をちらりと見た。——「この人の覚えのいいこと！ いいわ、今だつてかまやしないわ。……」

そう言つて、わたしの方へ身をかがめると、わたしの顔に、清らかな静かなキスを、一つしてくれた。

わたしはそういう彼女の顔を、ほんのちらりと見上げたただけだ

が、彼女はくるりとそっぽを向いて、「あとからついて来るのよ、お小姓さん」と言い捨てると、さっさと傍屋はなれの方へ歩き出した。

わたしは、続いて歩き出したが、心の中で絶えず疑いまどつていた。『いつたい』と、わたしは考えるのだった、——『このしとやかな、思慮しりよぶかい娘むすめが、これまでわたしの知っていたあのジナイーダなのかしら？』思いなしか、彼女の歩きつきまでが、前よりも静かになったような気がした。その姿もおしなべて、一層立派になって、すらりとしてきたような気がした。……

そして、我ながらいじらしいことだが、わたしの胸の恋情れんじょうは、なんと新しい力をもって、燃え立ったことだろう！

十六

夕食のあとで、また常連が傍屋はなれに集まって、令嬢れいじょうもその席へ出てきた。わたしにとつて終生わすれがたいあの最初の晩のよ
うに、そこには全員が、一人も欠けずにそろつていた。ニルマー
ツキイまでが、のこのこやって来ていた。マイダーノフは、その
晩イの一番にやって来たが、つまり新作の詩を持参およに及んだわけ
だった。またもや罰金ばつきんごっこが始まったけれど、もう以前のよ
うな突飛とつびな振舞ふるまいも、悪ふざけも、馬鹿騒ばかさわぎもなくて、——ジプ
シーめいた要素は消えうせていた。

ジナイーダが、わたしたちの一座を、新しい気分のものに切り

替えたのだ。わたしは小姓の役目から、彼女のそばに席を占めた。そうこうするうちに、やがて彼女は罰金に当たった人が自分のみた夢の話をすることを提案したけれど、これはうまくゆかなかつた。さっぱり面白くもない夢だったり（たとえばペロヴヅーロフは、愛馬にフナを食わせたが、その馬の首が木になっていた——という夢を見た）、あるいは不自然な、わざとでつちあげた夢だったりした。マイダーノフは、一編の小説をもって、我々をもてなした。そこには、アーチ形の古めかしい墓穴が出てきたり、豎琴を抱いた天使が現われたり、物を言う花だの、はるか
に漂ってくる楽の音だの、たいした道具だてだった。ジナイーダは、終りまで話させなかつた。

「一いったん旦もう、作り話になつたからには」と、彼女は言つた。――

――「こんどはみんな、何か話をすることにしましょう。自分で考へた話でなくちや駄目だめよ」

さて、まず第一に話をする番にあつたのは、またもベロヴヅ
――ロフだつた。

若い軽騎兵けいきへいは閉口して、

「僕ぼくは、話なんか考え出せませんよ！」と、わめいた。

「また、そんなつまらないことを！」と、ジナイーダは引取つて、
――「じゃ、たとえば、あなたがお嫁よめさんをもらつたと考へてみるのよ。そこであなたが、お嫁さんと一いっしょ緒にどんな風くらに暮すか、それを話してみるといいわ。あなたなら、お嫁さんを閉じ込めこめて

しまうでしょうね？」

「閉じ込めるです」

「で、ご自分も一緒にいるんでしょうね？」

「自分も、必ず一緒にいます」

「結構だわ。でももし、お嫁さんがそれに飽^あきて、あなたを裏切るようなことをしたら？」

「殺してしまうです」

「でも、お嫁さんが逃^にげだしたら？」

「追っかけて捕^{つか}まえて、やはり殺してしまうです」

「そう。でもね、かりにこのわたしが、あなたのお嫁さんだったとしたら、どうなすって？」

ベロヴゾーロフは、ちよつと絶句してから、

「そしたら、僕は自殺します……」

ジナイーダは笑い出した。

「どうもあなたの歌は、ぽつんと切れてしまうわねえ」

二番目の罰金は、ジナイーダに当つた。彼女は、眼を天井へ上げて考え込んだ。

「じゃ、いいこと」と、彼女はやがて話し出した。——「私の考

え出した話なのよ。……まず、立派な御殿を想像してちようだい。

夏の夜で、すばらしい舞踏会があるの。その舞踏会は、若い女

王のお催しなのよ。どこもかしこも、金や、大理石や、水晶

や、絹や、灯火や、ダイヤモンドや、花や、お香や、あらんか

ぎりの贅沢ぜいたくなもので、いっばいなもの」

「あなたは、贅沢ぜいたくがお好きですか？」と、ルーシンルースンが遮さへぎった。

「贅沢ぜいたくって、奇麗きれいですものね」と、彼女は答えた。——「わたしなんでも奇麗きれいなのが好き」

「立派なものよりもですか」と、彼が訊きいた。

「なんだか、ひねくつた言いようね。よくわからないわ。まあ、邪魔じゃましないでちょうだい。とにかく、すばらしい舞踏会舞踏会なの。お客お客も大勢おおぜいいて、それがみんな若くて、立派りっぺいで、勇敢ゆうかんで、みんな夢むちゆう中で女王様女王様に恋こいしているの」

「客の中に、女性はいないのでですか？」と、マレーフスキイが訊きいた。

「いないの。でも、ちよつと待って——やっぱり、いるわ」

「みんな不器量なんですネ？」

「すばらしい美人ぞろい。でもね、男はみんな、女王に恋してるの。女王は背が高く、すらりといい姿で、真つ黒な髪かみのうえに、小さな金きんの王冠おうかんを載せているの」

わたしは、ジナイーダをちらと見た。と、その瞬しゆんかん間、彼女は我々みんなよりも、ずっと高貴な存在に思われ、その白い額かみからも、じつと動かない眉まゆからも、なんとも言えない明るい知恵ちえや威力いりよくが、匂におってくるような気がして、わたしは思わず、『あなたこそ、その女王だ！』と、心に叫さけんだほどだった。

「みんな、女王様のまわりに、ひしめき合ってたね」と、ジナイー

ダは話を続けた。——「あらん限りのお追ついで従ようを奉たてまつるの」

「ほう。女王様は、お追従ついでが好きなんですね？」と、ルーシンが聞きとがめた。

「やりきれないわね、この人は！ まぜつ返してばかりいて。……お追従ついでの嫌きらいな人が、どこの世界にあつて？」

「もう一つだけ、最後に伺うかがいたいですか」と、マレーフスキイが口を出した。——「その女王には、夫があるのですか」

「わたし、そんなこと考えもしなかつたわ。いいえ、夫なんて要いるもんですか」

「そうですとも」と、マレーフスキイは相あいづち槌ちを打った。——

「夫なんて、要いるものですか」

「静かに《シランス》！」とフランス語のからつ下手なマイダーノフが、フランス語で叫んだ。

「ありがとう《メルシ》」と、ジナイーダは彼に酬いて、――

「さて女王は、そんなお追従に耳をかしたり、音楽を聴いたりしているけれど、その実お客の誰一人にだつて、目もくれないの。

六つの大窓が、上から下まで、天井から床まで、すっかりあけ放たれて、その外には、大きな星くずをちりばめた暗い夜空や、大きな木々の茂った暗い庭があります。女王は、その庭に見入っているの。そこには、木立のそばに噴水があつて、闇の中でも白々と、長く長く、まるで幻のように見えています。女王の耳に

は、人声や音楽の合間々々に、静かな水音が聞えるのです。女王

は、闇に見入りながら、こんなことを考えるの——皆みなさん、あなた方はみんな、とうと貴い生れで、かしこ賢くて、お金持です。あなた方は、わたしを取巻いて、わたしの一言一句を重んじて、わたしの足もとで死ぬ覚悟かくごでいらつしやる。つまりわたしは、あなた方の生死を、わたしの手に握にぎっているわけです。……ところが、あの噴水のそばには、あのさわさわと鳴る水のそばには、わたしの愛する人、わたしの生死をその手に握っている人が、たたずんで、わたしを待っているのよ。その人は、おごった衣いしやう裳も着ていないし、宝石もつけてはいず、誰もその名を知る人はありません。けれど、その人はわたしを待ち受けているし、また、わたしがきつと行くものと信じきっています。——ええ、わたしは行きますとも。一

旦那わたくしが、その人のところへ行つて、一緒になろうと思つたら最後、わたしを引留めるほどの力は、この世のどこにもありません。そこでわたしは、あの人と一緒に、あの庭の暗がりへ、木立のそよぐもとへ、噴水のさわさわ鳴る陰^{かげ}へ、姿を消してしまふの……とね」

ジナイーダは口をつぐんだ。

「それは作り話ですか」と、マレーフスキイが鎌^{かま}をかけた。

ジナイーダは、見向きもしなかつた。

「だが諸君、いったいどんなものでしょうな」と、出し抜け^{だぬ}にルーションが言い出した。——「かりにもし、我々もそのお客さんの中において、しかもその噴水のほとりの仕合せ者のことを知ってい

るとしたら、我々は果して、どうするだろうか」

「待つて、ちよつと待つて」と、ジナイーダが遮った。——「あなた方が一人々々どうなさるか、わたし自分で言つてみるわ。あなたはね、ベロヴゾーロフさん、その人に決闘けつとうを申込むわね。マイダーノフさん、あなたは、その人に当てつけた諷刺詩ふうしを書くわ。……でも、そうじゃないわ——あなたは諷刺詩が書けないから、バルビエ風の短長格の長詩でも作つて、その力作を『テレグラフ』誌に発表なさるわ。それから、ニルマーツキイさん、あなたはその人から、お金を借り出すわ……じゃない、あべこべにお金を貸して、利息を取るわね。ところで、あなたは、ドクトル……」彼女は言いよんだ。「そうねえ、あなたのことはわからないな

いわ、どうなさるか」

「僕は侍医じいの役目として」と、ルーシンは答えた。——「その女王を諫いさめますな。お客どころでない非常時に、舞踏会なんか催さないようにね。……」

「なるほど、おっしゃるとおりかもしれないわね。ところで伯はくし爵やく、あなたは？……」

「わたしは？」と、例の不気味な微笑びしょうを浮べて、マレーフスキイが鸚鵡おうむがえ返しに言った。

「あなたなら、毒の入ったお菓子を、その人にすすめるわね」

マレーフスキイの顔は、かすかに引きつって、一瞬間ユダヤ人のような表情を帯びたが、すぐ高笑いにまぎらしてしまった。

「さてそこで、ヴォルデマールさん、あなたはどうするかと言うと……」と、ジナイーダは続けたが、——「でも、もうたくさんだわ。何かほかのことをして遊びましょう」

「ヴォルデマール君は、お小姓の資格で、女王様が庭へ駆け出す時、その裳裾もすそを捧持ほうじするでしょうな」と、毒々しい口調でマレーフスキイが一矢いっしをむくいた。

わたしはカツとなった。しかしジナイーダは、素早すばやくわたしの肩かたに手を置くと、半ば身を起しながら、やや顫えふるを帯びた声で、こう言い放った。

「わたし、無礼な口をきく権利なんか、差上げた覚えはございません、伯爵。ですから、このまま御退席ごたいせきを願います」そう言っ

て、ドアをさして見せた。

「とんだことです。お嬢さんじょうさん」と、マレーフスキイはつぶやいて、真つ青になってしまった。

「令嬢の言われるとおりだ」と、ベロヴゾーロフはわめいて、やはり立ち上がった。

「わたしは、誓ちかつて言いますが、こんなこととは思ひもかけなかつたのです」と、マレーフスキイが続けた。——「わたしの言葉には、別にこれといったことも、ないようですし……第一、お気を悪くさせようなどという考えは、毛頭なかつたのです。……許して下さい」

ジナイーダは、冷たい一瞥いちべつを彼に投げると、冷やかな薄笑うすわら

いを漏らした。

「じゃ、いいわ、いらしても」と彼女は、無造作に手を一振りし
て言った。——「わたしもヴォルデマルさんも、つまらない向
つ腹ぽらを立てたものだわ。あなたは、皮肉を言うのが楽しみなのね
……たんとおっしゃるがいいわ」

「許して下さい」と、もう一遍いっぺんマレーフスキイは繰返くりかえした。

一方わたしは、今しがたのジナイーダの手の振りようを思い浮うか
べながら、本当の女王様でも、あれ以上の威厳いげんをもつて、無礼者
にドアをさして見せることはできまいと、改めてまた心に思った。

この小さな一幕のあつたあとは、罰金きづまごつこも長続きしなかつ
た。みんないささか気詰きづまりになつてきたが、それは当のその一幕

のためというより、もつと別の、あまりはつきりしないが何かしら重苦しい、ある感情のためであった。誰もそのことを口に出さず、こそしなかつたけれど、みんなそれぞれ、自分の胸にも仲間の胸にも、そんな感情がわだかまっていることを意識していたのだ。

やがて、マイダーノフが自作の詩を朗読すると、マレーフスキイは大げさな熱ねつきよう狂ぼぶりでもって褒めそやした。

「こんどは先生、善良に見られたがつてるんですな」と、ルーシオンがわたしに耳打ちした。

わたしたちは、まもなく散会した。ジナイーダは急に物思いに沈しずんでしまふし、公爵夫人は頭痛がすると言いによこすし、ニルマーツキイはリユーマチが痛むと言い出す——といった始末だつ

たからである。

わたしは、長いこと寝つかれなかった。ジナイーダのした話で、
激しく心を打たれたのだ。

『ほんとにあの話には、何か暗示があるのだろうか？』と、わたしは自分に尋ねた。——『そしていつたい誰を、そして何事を、彼女は仄めかそうとしたのだろうか？ それにしても、暗示すべき事がちやんとあるとすれば……思い切つて言い出すことが、できるものかしら？ いやいや、そんなはずはない』

わたしは、火照った頬を代る代る枕へ当て変えながら、そうさ
さやいた。……とはいえわたしは、さつきあの話をした時のジナイーダの顔の表情を思い出し……それから、ネスクーチヌイ公園

でルーシンが思わず発したあの叫び声や、彼女のわたしに対する態度が急に変ったことまでも思い出して——すっかり訳がわからなくなるのだった。「その男は誰か？」これだけの言葉が、闇のなかにくつきりと印されて、わたしの眼めの前に立っていた。まるでそれは、低い不吉な雲が頭上に垂たれこめたみたいな気持で、わたしはその重圧をひしひしと感じながら、それが爆ばく発はつする時を、今か今かと待ち構えていた。近ちかごろ頃ころになつてわたしは、いろんなことに慣れもしたし、ことにザセーキン家では、やつとこさいろんなことを見せつけられた。彼らのふしだらさや、あぶら蠟ろうそく燭そくの燃えさし、欠けたナイフやフォーク、陰いんき気きくさいヴオニフアーチイ、尾羽おはうち枯からした小間使たち、当の公爵夫人の立居振舞い

——そんな奇怪^{きかい}千万な暮しぶりなんかには、もうビクともしなくなっていた。……だが、今ジナイーダの身に漠然^{ぼくぜん}と感じられる或^あること、——それには何としても馴染^{なじ}むことができなかった。……「男たらし」と、わたしの母はいつぞや彼女のことを罵^{のの}した。その「男たらし」である彼女が、わたしの偶像^{ぐうぞう}であり、わたしの神とあがめる存在なのだ！ その悪罵^{あくば}が、わたしの胸を焼き焦^こがした。わたしはそれから逃^{のが}れようと、枕に顔を埋^うめた。わたしは無性^{むしよう}に腹が立ったが、同時にまた、噴水のほとりのあの仕合せ者になれさえしたら、どんなことでも承知してみせるどんな犠^{せい}牲^{せい}でも払^{はら}ってみせる、と思った。……

体じゅうの血が燃えたぎった。『庭……噴水……』と、わたし

は思った。……『よし、ひとつ庭へ出てみよう』わたしは手早く服を着けて、家から抜け出した。

闇の夜で、木々はかすかにそよいでいた。空からは、静かな冷気が下りてきて、野菜ばたけからは、ういきよう 茴香の香りが漂つてきた。わたしは、何本かのなみきみち 並木道をすっかり歩いてしまった。自分の軽い足音が、わたしをとうわく 当惑させもすれば、はげ 励ましてもくれた。わたしは時々立ち止つて、何ものかを待ち受けながら、自分の心臓がはやがね 早鐘のように高鳴るのに耳をすました。やがての果てに、わたしは垣根かきねのそばへ行つて細い棒ぐいによ 倚りかかった。と不意に——あるいは、そら耳だつたらうか——わたしからつい五、六歩のところを、さつと女の姿がひらめいて過ぎた。……わたし

は、闇のなかへひたと眼をこらし、息をひそめた。これは何だろう？ 聞いたのは、誰かの足音だったろうか、——それとも自分の心臓の高鳴りだったろうか？「誰だ、そこにいるのは？」と、わたしは言ったが、舌がもつれて、ほとんど聞き取れない声だった。また何か物音がした。あれは何だろう？ 押し殺した笑い声か？……それとも、そよぐ木の葉か？……それとも、耳のすぐそばで漏らされた溜息ためいきか？ わたしは、こわくなった。……「誰だ、そこにいるのは？」と、わたしは声を低めて、また言った。空気は、ほんの一瞬間、さっと流れた。空には、一筋、火のよ
うな筋がきらめいた。星が流れたのだ。

『ジナイーダ？』と、わたしは訊こうとしたが、音はわたしの唇くちびる

で空^{むな}しく消えた。そして突^{とつぜん}然、あたりのものみな、深い沈^{ちん}黙^{もく}に沈んでしまった。真夜中にはよくあることである。……木陰の
コオロギまでが鳴りをひそめて——ただどこかの窓が、かたりと
いったただけだった。わたしは、帰ろうとしては佇^{たたず}み、帰ろうとし
ては佇みしていたが、やがて自分の部屋へ、自分の冷えはてた寝^ね
床^{どこ}へ歸^{どこ}った。わたしは、異常な興奮を感じていた。さながら逢^{あいび}
引^きに出かけて行って、結局ひとりぼっちで、他人の幸福のそば
を指をくわえて通ったような。

十七

そのあくる日、わたしはジナイーダを、ほんのちらりと見ただけだった。彼女かのじよは公爵夫人こうしやくふじんと一緒にいっしょに辻馬車つじばしやに乗って、どこかへ出かけるところであった。そのかわりわたしは、ルーシオンに会った。もつとも彼はかれ、ろくろくわたしに挨拶あいさつもしなかつたが。それからまた、マレーフスキイにも出会った。若い伯はくしや爵くわくは、にやにや作り笑いをしながら、さも親しげに話しかけた。傍屋はなれの常連の中で、どうしたわけかこの伯爵だけは、わたしの家いへにうまく取り入って、母のお気に入りだったのである。もつとも父は、この伯爵を毛嫌いけぎらいして、無礼なほどの丁重さであしらつていた。

「おや、お小姓君パージユ」と、マレーフスキイは口を切った。——「お

目にかかれて、じつに嬉しいです。あなたの美しい女王様は、何をしておられますか」

彼のすがすがしい秀麗な顔が、その瞬間わたしには、虫酸が走るほど厭だつたし、おまけに彼が、人を馬鹿にしたようなふぎけた眼つきで、じつとわたしを見ているので、こっちは返事もしてやらなかつた。

「君はまだ、おこっているのですか」と、彼は続けた。——「つまらんことですよ。第一、君にお小姓という名をつけたのは、僕じゃないんだし、それにまたお小姓というものは、まずもつて女王様の付き物ですからねえ。だがしかし、失礼ながら一言御注意しますが、どうも君は職務怠慢ですな」

「どうしてです？」

「お小姓というものは、女王様のそばを離れてはいけないのですよ。お小姓は、女王様の一挙一動をみんな知っているべきだし、いつそ女王様の見張りをさえ勤めるべきものなんですよ」そこで声を低めて、彼は言い添えた、——「昼も、夜もね」

「それは、どういう意味です？」

「どういう意味？ 僕は、はつきり言っているはずですがね。昼も——夜も、ですよ。昼間はまあ、なんとかなるでしょう。日の目はあるし、人目もありますからね。ところが夜というやつは、とかく災わざわいの起りがちなものでね。まあ悪いことは言わないから、夜ぐうぐう寝ねてないで、一生けんめい大きな眼をあけて、見張り

をするんですね。ほら、覚えているでしょう——庭、夜なか、嘖ふ水んすいのほとり——そういう場所で待ち伏ぶせるんですな。いまに君は、僕にありがとうを言うでしょうよ」

マレーフスキイは高笑いをして、くるりとわたしに背を向けた。彼はおそらく、自分の言ったことを、特に重大とも思っていないか
つたろう。何しろ彼は、人をかつぐ名人として通っていたし、仮か装そうぶとうかい舞踏会などで、まんまといっぱいくわせる妙みょうぎ技うたを謳うたわれていたからである。これには、彼という人間全体にしみとおつている無意識な嘘うそつき癖くせが、あずかって大いに力があつたのだ。……
彼はただ、わたしをちよいとからかおうと思っただけのことだろ
うが、その一言一句は猛もうれつ烈な毒となつて、わたしの血脈けつみやくと

いう血脈を走り回った。血がどつとばかり、頭へ押しよせた。

『ああ！ そうだったのか！』と、わたしはひとりごちた。――

『よし！ するとつまり、僕がなんとなく庭へ惹かされていたのも、やはり意味のないことじゃなかったのだ！ いやいや、そんなことがあるもんか！』と、わたしは大声でわめいて、握りこぶしで胸をどんと叩いたが、そのくせ、何があつてはならないのかという点になると、自分でも見当がつかなかったのである。

『マレーフスキイ御自身、庭へ出馬なさるわけかな』と、わたしは考えた。（彼がひよいと、口をすべらしたのかもしれない。そのくらいの鉄面皮さなら、ありあまつている彼のことだから）

――『それとも、誰かほかのやつが現われるかな。（うちの庭の

垣根^{かきね}は、とても低かつたから、乗り越^こえるにはなんの造作^{ぞうさく}もなかつた)——だがとにかく、僕に取つつかまつたやつは、百年目だぞ！ 誰にもせよ、僕にぶつからないように用心するがいい！

僕は、僕だって復讐^{ふくしゅう}する力があることを、世間のやつらにも、裏切り者のあの女にも(とわたしは、ずばりと彼女を裏切り者と呼んだ)——思いしらせてやるぞ！』

わたしは、自分の部屋へ戻ると、デスクの引出しから、この間買ったばかりの、イギリス製のナイフを取出して、その切れ味をためしてみた。それから眉^{まゆ}の根を寄せて、一点に集中した冷やかな決意をもって、それをポケットに収めた。そんなことは、別^{おどろ}におどろくほどのことはないし、またこれが最初でもない——といった

調子であった。わたしの心臓は、毒々しくたけり立って、石のよう
にコチコチになった。わたしは夜がふけるまで、眉をしかめた
まま、唇をキツと噛みしめて、絶えず部屋の中を行きつ戻りつし
ながら、熱しきったナイフをポケットのなかで握りしめ、何かし
ら凄じい出来事にたいする心構えを、あらかじめ整えていた。こ
の新しい、ついぞ味わったこともない感覚は、わたしを酔わせた
ばかりか、陽気にさえしたので、肝心のジナイーダのことは、
ほとんど考えに上らないほどだった。わたしの念頭には、絶えず
こんな文句がちらついていた。

——アレーコ、若いジプシー。——「どこへ行く、この色男め
？ そのまま寝ている……」それから、「まあ、あなた血だらけ

じやないの！ ……なんてことをしたの？」 ……「なんにも、しやしない！」（訳注 プーシキンの叙事詩『流浪の民』より）
なんとという残ざんにん忍にんな微笑びしょうを浮うかべながら、わたしはこの『なんにも』という句を、繰くりかえ返かえしたことだろう！

父は家にいなかった。しかし、この間からほとんどしよつちゅう、内ないこう攻こうしたいらだちの状態じょうたいでいる母は、わたしのただ事ただごとでない様子ようすに目をつけて、夜食よじきの時、わたしにこう言った。

「何を前まへ、そうふくれ返かえっているんだね？ まるでネズミが、ひきわり麦むぎをねらってるみたいにさ」

わたしは返事こたへの代りに、ほんのお付合あひあひいにやりと笑わらってみせて、『この気持きもちを、親おやが知しつたらなあ！』と考えた。十一時じゅういちじが打う

った。わたしは自分の部屋へ引きとつたが、服は脱がずにいた。わたしは、真夜中を待っていた。やがて、十二時が打った。『さあ、潮時だ！』と、わたしは齒を食いしぼりながらささやいて、上着のボタンを上まで掛け、御丁寧ごていねいに両の袖そでをたくし上げて、庭へ出かけて行つた。

わたしはあらかじめ、見張りの場所を決めていた。わたしたちの領分とザセーキン家の領分との地境じざかいを成している垣根が、共同の堀へいにぶつかっている庭のはずれに、樅もみの木が一本、ぽつんと立っていた。その低く茂しげった枝の下に立っていれば、夜の闇やみがゆるす限りは、あたりで起ることの一切いっさいが、よく見えるのだつた。そこには、一筋の小道がうねっていて、それがいつも、へんに神

秘めいてわたしには見えた。というのはその小道が、ちょうどその場所で人が乗り越えたらしい足跡あしあとの残っている垣根の下を、蛇へびのように這はい抜ぬけて、アカシアばかりでできている円い四阿あずまやへ、通じていたからである。わたしは樅の木へたどり着くと、その幹こに倚よりかかつて、見張りを始めた。

前の晩と同じく、静かな夜だった。しかし、空には雨雲が減つて、灌木かんぼくの茂みの形のみならず、背の高い草花の影かげまでが、一層はつきり浮んでいた。待ち構える身にとって、最初の幾瞬いくしゆん間は辛つらかった。ほとんど恐おそろしいくらいだった。覚悟かくごはすつかりできていたけれど、さてどういふ行動に出たものか、それだけが心こころがかりだった。『どこへ行くのだ？ 止れ！ 白状しないと、

殺しちまうぞ!』と、どなりつけてやろうか。それとも、ひと
いに斬きりつけてやろうか。……ちよつと音がしても、枝えだや葉が力
サリと鳴つても、さやいでも、それが一々わたしには何か意味あ
りげに、ただ事でないように聞えた。……だんだん覚悟ができて
きた。……わたしは上体を前へ乗り出した。……ところが、半時
間たち、一時間たつうちに、わたしの血潮はしだいに静まり、冷
めていった。こんなことをしたつて無駄むだ骨ぼねだ、我ながらいささか
滑こっけい稽けいなくらいだ、これはてつきりマレーフスキイのやつがいつ
ぱい食くわしたのだ——という意識が、じりじりと胸の中へ忍しのび込こ
んで来た。わたしは待ち伏せの場所を離れて、庭をぐるり一回り
してみた。まるでわぎとのように、ほんの葉はずれほどの音さえ、

どこにもしなかった。何もかも、しんと静まり返って、うちの犬までが、木戸のそばに丸くなって眠ねむっていた。わたしは、温室の崩れ残りによじ登った。遠い野原が眼めの前にひらけ、この間ジナイーダに出会った時のことが思い出されて、わたしは物思いに沈しずみ始めた。……

わたしは、ぎくりとした。……どこかでギイと戸のあく音がして、それから小枝の折れる音が、かすかにしたような気がしたのだ。わたしは、ふた跳とびで崩れ残りから跳とびおけると、——その場に立ちすくんでしまった。すばやい、軽かろやかな、それでいて用心ぶかい足音が、はつきりと庭の中に響ひびいていた。だんだんわたしの方へ近づいてくる。『さあ、来た。……いよいよやって来た

ぞ！』という考えが、わたしの心臓をかすめた。わたしは、引つ
つたようにナイフをポケットから抜き出すと、ぐいとそれを開
いた。——何か赤い火花のようなものが、眼のなかでくるくる回
りだし、恐ろしさと憎にくさとで、頭の毛がもずもずうごめいた。：
：足音は、まっすぐわたしの方へ進んで来る。わたしは、そろそ
ろ腰こしを落して、足音に向つて身構えた。……男の姿が現われた。

……南無三なむさん！ それはわたしの父だった。

わたしは咄嗟とつさに見分けがついた。父は全身すつぽり黒マントに
くるまり、帽子ぼうしを目深まぶかにおろしていたが、それでは包み匿かくせな
かった。彼は爪先つまさき立ちで、そばを通り過ぎた。わたしには気がつ
かなかつた。わたしは、何に身をかくしていたわけでもないけれ

ど、地面に這はいつくばらんばかりに小さく縮こまっていたのである。嫉妬しつとにかられて、人殺しの覚悟までしていたオセロは、突とつじ如よとして小学生に化してしまった。……思いもかけぬ父の出現に、わたしはびっくり仰ぎょうてん天のあまり、彼がどこからやって来て、どこへ姿を消したのか、初めは気がつかなかったほどであった。わたしがやつと身を伸のばして、『なんだってお父さんは、よる夜中に庭なんぞ歩くんだらう』と考えたのは、再びあたりが、しんと静まり返った時であった。恐ろしさのあまり、わたしはナイフを草むらに落してしまったが、それを捜さがすどころではなかった。恥はずかしくてならなかったのだ。

わたしは一いっぺん遍に酔いがさめた。とはいえ、家へ戻もどる途とちゆう中で、

わたしはやはり、ニワトコの陰かげの例のベンチのそばへ行つて、ジナイーダの寢室しんしつの小窓を見上げた。すこし反り返っている何枚かの窓ガラスは、夜空から落ちるかすかな光を受けて、ぼうつと青みを帯びていた。と不意に、その色が変わり始めた。……内側から、——そう、わたしは見たのだ、この眼ではつきり見たのだ——白っぽい巻きカーテンが、そつと用心ぶかく下ろされて、窓がまちのところまで下りきつてしまうと、そのままじつと動かなくなつた。

「これはいったい何事だろう？」と、いつのまにか自分の部屋に舞まい戻つていたわたしは、ほとんど無意識に、そう声に出して言つた。——「夢ゆめなのか、偶然ぐうぜんなのか、それとも……」

そこで突然^{とつぜん}あたまに浮んだ或^ある憶測^{おくそく}は、あまりにも生々しく、あまりにも異様なものだったので、わたしはどだい受付ける勇氣もなかった。

十八

あくる朝わたしは、頭痛をおさえながら起き出した。ゆうべの興奮は消えていた。その代り、重くるしい疑惑^{ぎわく}と、まだ身に覚えたこともない——まるでわたしの中で何ものかが息を引き取ろうとしているような、一種異様なわびしさが、わだかまっていた。「なんだって君は、脳みそを半分^ぬ抜き取られた兎^{うさぎ}みたいな顔をし

ているのですね？」と、出会いがしらにルーシンが言った。

朝飯のとき、わたしは父の様子や母の顔色を、こっそり窺^{うかが}った。

父は、いつものとおり落着きはらっていたが、母は例によつて、

内心いらいらしていた。わたしは、父が時々出す癖^{くせ}で、打解けて

わたしに話しかけはしまいかと心待ちにしていた。……けれど父

は、つね日頃^{ひごろ}の例の冷たいお愛想をすら、言つてはくれなかつた。

『すっかりジナイーダに話してしまおうか？』と、わたしは考え

た。……『こうなつたからには、どつちみち同じじやないか――

どうせ二人の間は、きれいにお仕舞^{しま}いなんだもの』

わたしは彼^{かの}女^{じよ}のところへ出かけて行つたが、肝^{かん}心^{しん}の話を切

り出すどころか、雑談さえ思うようにできない始末^{こうし}だつた。公

爵夫人やくふじんの生みの息子むすこが、ペテルブルグから帰省して来たのである。幼年学校の生徒で、十二ぐらいの子だった。ジナイーダはこの弟を、早速さつそくわたしの手にあずけた。

「さあ、よくつて」と、彼女は言った。——「わたしの可愛かわいいヴオロージャ（彼女がわたしを愛称で呼んだのは、これが初めてだった）、あなたのいい仲間ができたわ。この子もやつぱり、ヴオロージャっていうのよ。どうぞ、可愛がつてやつてちょうだい。まだ野育ちだけれど、気だてはいいのよ。ネスクーチヌイ公園でも見せてやつて、一いっしょ緒に散歩して、目をかけてやつて下さいね。ね、いいでしょう、そうして下さるわね？ あなたも、ほんとにいい人なんですもの！」

と言つて、彼女が両手を優しくわたしの肩にかけたので、わたしはすっかりまごついてしまった。この少年が来たおかげで、わたしまでが子供に成り下がったわけである。わたしは黙つて、幼年学校の生徒を眺めた。向うもやはり無言のままわたしを見つめた。ジナイーダは、ホホホと笑い出して、わたしたち二人を、どすんとぶつけ合わせた。

「さ、抱き合うのよ、いい子だから！」
我々は抱き合つた。

「どうです、庭を案内しましょうか？」と、わたしは幼年学校の生徒に訊いた。

「は、どうぞ」と彼は、いかにも幼年学校の生徒らしい、しやが

れ声で答えた。

ジナイーダはまた笑い出した。……そのひまにわたしは、彼女の顔にこれほど艶麗えんれいな紅あからみのさしたことは、ついぞなかったことに気がついた。

わたしは、幼年学校の生徒と一緒に出かけた。うちの庭には、古いブランコがあつた。わたしは彼を細い板ぎれすわに坐らせて、揺すぶってやり始めた。彼は、幅はばの広い金モールのついた、新調らしい厚地のラシヤの制服を着て、身じろぎもせず坐つたまま、しつかり綱つなにつかまっていた。

「襟えりのボタンでもはずしたらどうです？」と、わたしは言つてやった。

「いいであります、慣れていきますから」と彼は言つて、
咳せき払ばらい
をした。

彼は姉さんに似ていた。とりわけ眼めがそつくりだった。わたしは、この少年の面倒めんどうを見てやるのが楽しくもあつたけれど、同時にまた、相も変らぬうずくような佻わびしさが、そつとわたしの胸を噛かむのであつた。『ああ、これでもう、僕ぼくはすつかり赤あかん坊ぼうだ』と、わたしは思った。——『ところが昨日は……』

わたしは、ゆうベナイフを落した場所を思い出したので、そこへ行つて拾い上げた。幼年学校生は、それをねだり取つて、ウドの太くきい茎きを折ると、それで笛ふえを削けずりあげ、ぴゅうぴゅう吹ふき出した。オセロもやはり、ちよつと吹いてみた。

だがその代り、その夕方になると、この同じオセロが、ジナイ
ーダの胸に抱かれて、どんなに泣いたことだろう！ それは彼女
が、庭の隅でオセロを見つけ出して、なぜそんなに悲しそうにし
ているのかと、尋ねた時のことである。するとわたしの涙が、お
そろしい勢いでほとばしり出たので、彼女はびっくりしてしまっ
た。

「どうしたの？ いったいどうしたの、ヴォロージャ？」と、ジ
ナイーダは繰返したが、わたしが返事もしないし泣きやみもし
ないのを見て、わたしのびしょ濡れの頬にキスしようとした。が、
わたしは顔をそむけて、むせび泣きのひまから、こうささやいた。

「僕は、すっかり知っています。なぜあなたは、僕をおもちやに
したんです？……なんのために、僕の愛が入り用だったんです？」
「申し訳ないわ、ヴオロージャ……」と、ジナイーダは言った。
——「ああ、ほんとに申し訳ないわ……」と続けて、両手をぎゅ
っと握り合せた。——「わたしの中には、悪い、後ろ暗い、罪ぶ
かいものが、なんていっぱいあるでしょう。……でも今はわた
し、あなたをおもちやになんかしていないわ、あなたを愛してい
るの、——それが、なぜ、どういうふうにかつていうことは、あ
なたには夢にも想像がつかないわ。……それはそうと、何をいつ
たいあなたは知ってらっしゃるの？」

何をわたしが彼女に言えたらう？　彼女はわたしの前に立って、

じつとわたしを見つめていた。そしてわたしは、彼女に見つめられるが早いか、たちまち頭から足の先まで、すっかり彼女の俘とりこになつてしまふのだ。……それから十五分すると、わたしはもう幼年学校生やジナイーダと、鬼おにごっこをしていた。わたしは泣かずに、笑っていたけれど、泣きはらした目蓋まぶたは、笑うたんびに涙をこぼすのだった。わたしの首つ玉には、ネクタイの代りに、ジナイーダのリボンが結んであつた。そしてわたしは、首尾しゅびよく彼女の胸をつかまえるたびに、歡喜さけの叫びをあげるのだった。彼女はわたしを、思うままにあやつつていたので。

十九

例の失敗におわつた夜中の遠征えんせいから、一週間の間にわたしの
経験したことを、詳しく話くわしてみると言われたら、わたしは頗るすこぶ
閉口するに違いない。それは、まるで熱病にでもかかったような
異様な時期で、えたいの知れぬ混沌こんとんを成しており、この上もな
く矛盾むじゆんした感情や、想念や、疑惑ぎわくや、希望や、喜びや、悩みなやが、
つむじ風のように渦うずまいていた。わたしは、自分の心の中を覗のぞい
て見るのが怖こわかった。(ただし、十六歳さいの少年にも、自分の心
中が覗きこめるものとすればだが)何事にせよ、はつきり突き止つ
めるのが怖かった。わたしはただ、手つとり早く一日を晩まで暮くら
そうと、あせっていた。その代り、夜はぐっすり眠ねむった。……子

供つぽい無分別も、この際だいぶ役に立った。わたしは、自分から愛されているかどうか、知ろうともしなかつたし、人から愛されていないと、はつきり自認じにんするのも厭いやだつた。わたしは父を避さけていたが、ジナイーダを避けることは、わたしにはできなかつた。……彼女かのじよの前へ出ると、まるで火に焼かれるような思いがするのだつたが……わたしを燃やし熔とかしてゆくその火が、いったいどういう火かということを、別に突き止めたいとも思わなかつたのは、ただそうして熔けて燃えてゆくのが、わたしにはなんとも言えずいい気持だつたからである。わたしは刻々の印象に、身を任せつぱなしにした。そして自分に対して狡ずるく立ち回つて、思い出から顔をそむけたり、前途ぜんとに予感されることに目をつ

ぶったりした。……こうした責苦せめくは、ほうっておいてもおそらく長くは続かなかつたろうが……そこへ降らくちやくつてわいた出来事が、まるで落雷らくらいのように一挙にすべてに落らくちやく着やくをつけ、わたしの道を切り換かえてくれたのである。

ある日のこと、かなり長い散歩から、昼飯おどろに帰つてみると、驚いたことには、わたしは一人きりで食事をしなければならぬことがわかった。父は外出しているし、母は気分が悪いから何も食べたくないと言って、寢室しんしつにとじこもっていたのだ。従僕じゆうぼくたちの顔色から、わたしは何かしら変つたことが起きたなと察した。……従僕たちに問いただしてみる勇氣は出なかつたが、幸いわたしには、食堂係の若者でフィリップという仲好なかよしがいた。これは

熱烈な詩の愛好者で、またギターの名人だ。——わたしは、この男に訊いてみることにした。さて彼の話によると、父と母の間には、すぎまじい一場が演ぜられたのだった。（それは一言残さず女中部屋へ筒抜けに聞えた。フランス語をだいぶ使っていたが、小間使のマーシャというのが、パリから来た裁縫師のところに五年もいたので、全部わかったのである）母は父の不実を責め、隣の令嬢との交際をなじった。父は最初、なにかと弁解していたが、やがてカツとなつて、しつぺ返しに、『どうやら奥様のお年のことで』むごい言葉を投げつけたので、母は泣き出してしまった。母はまた、公爵夫人にやつたとかいう手形のことを持ち出して、さんざん老夫人をこきおろし、ついでに令嬢

の悪口まで並べたので、父はそこで何やら脅かし文句を叩きつけたそうだ。

「こんな騒動になりましたのも」と、フィリップは言葉を続けた——「もとはと言えば、無名の手紙からでございます。誰が書

いたものやら、それはわかりませんが、それさえなければ、こんな事柄が表沙汰になるわけは、少しもありませんですよ」

「じゃ、やつぱり、何か事柄があつたんだね」とわたしは、やつとのことと言つたが、その間にわたしの手足は冷たくなり、胸のずっと奥の方で何かわななき出したものがあつた。

フィリップは意味ありげに目配せして、「ありましたです。こういう事は、隠しおおせるものじゃございません。旦那様も今

度という今度は、ずいぶん用心ぶかくやんなさいましたけれど、——やはりまあ早い話が、馬車を雇うとか何とか……とにかく人手なしでは済まないわけですね」

わたしは、フィリップを下がらせると、ベッドの上のところがつた。わたしは、咽び泣きに泣きもしなかつたし、絶望の俘にもならなかつた。また、そんな事がいつたいいつ、どんな風に起つたのかと自問してみるでもなかつた。どうして自分があらかじめ、もつとずっと前に察しがつかなかつたものかと、それを不審に思うでもなかつた。父を怨めしいときえ思わなかつた。……わたしの知つた事實は、とうていわたしの力の及ばないことであつた。この思いがけない発見は、わたしを押しつぶしてしまつたのであ

る。……一切は終りを告げた。わたしの心の花々は、一時に
残らずもぎ取られて、わたしのまわりに散り敷いていた。——投
げ散らされ、踏み^ふにじられて。

二十

あくる日になると母は、町へ引揚^{ひきあ}げると言い出した。その朝、
父は母の寢室^{しんしつ}へ入つて、長いこと二人きりでいた。父が何を言
つたか、誰^{だれ}も聞いた者はないけれど、とにかく母はもう泣かなく
なった。母は気持が落着いて、食事を命じたりしたが、とはいえ
やはり姿を見せず、決心を変えもしなかつた。忘れもしない——

わたしはその日は一日いちんちじゆう散歩ばかりしていた。もつとも庭へは足を入れず、はなれ傍屋を一度だつて振向きふりむもしなかつた。ところがその晩になつて、わたしは驚くべき出来事をこの眼めで見ることになった。父がマレーフスキー伯爵はくしやくの腕うでをとつて、広間を横ぎつて玄関げんかんの方へ連れ出し、従僕じゆうぼくのいる前で、冷やかにこう言い渡したのである。――

「二、三日まえ、ある家であなは、ドアをさして見せられたことがありましたな、伯爵。ところで今わたしは、あなたと別に話し合いをしようとは思いませんが、きようしゆく恐縮ながらこれだけは申上げておきます――もしあなたが、この上また宅へお見え下さるようなことがあつたら、わたしはあなたを窓からほうり出します

よ。わたしには、あなたの筆跡ひっせきが気に入るわんです」

伯爵は頭を下げ、齒をくいしばると、小さくなつて姿を消した。

モスクワへ引揚げる準備が始まつた。アルバート街にわたしたちの家があつたのである。おそらく父自身にしても、今ではもう別荘べっそうに残つていたくはなかつたろう。ただし、父は、この際になつてまた一悶着ひともんちやくもちあげないように、首尾しゆびよく母を説きつけたらしかつた。万事は穩やかに、ゆつくりと運んだ。母は公爵夫人にわざわざ人をやつて、健康がすぐれぬため出発まえにお目にかかれず、まことに残念に思いますと挨拶あいさつさせた。わたしはきようじん狂人のように、ふらふら表を歩き回つて、一刻も早くこんな

騒さわぎがおしまいになつてくれればいいと、そればかり待ち望んで
いた。ただ一つだけ、わたしの念頭にこびりついて離はなれぬ想念が
あつた。それは彼かの女じよが、あの若い娘むすめが——しかも、とにもかく
にも公爵令れいじ嬢じやうともあろう人が、現にわたしの父が独ひとり身みでな
いことは承知でいながら、また、よしんばあのペロヴゾーロフに
しろ誰にしろ、結けつ婚こんの相手にこと欠かない身でありながら、ど
うしてあんな思い切つたまねをしたのだろう——ということであ
つた。いったい何をあてにしていたのだろう？　みすみす自分の
前途ぜんとを台なしにするのが、どうして怖おそろしくなかつたのだろう？
そうだ、とわたしは思った、——これが恋こいなのだ、これが情熱
というものなのだ、これが身も心も捧ささげ尽つくすということなのだ。

……そこでふと思ひ出されたのは、いつかルーシンの言つたことである——『自分を犠牲ぎせいにすることを、快く感じる人もあるものだ』

ひよいとわたしは、傍屋はなれの窓の一つに、青白いものがぼつんと浮うかんでいるのを目にした。……

『あれはジナイーダの顔じゃないかしら』と、わたしはふつと思つたが……果してそれは彼女の顔だった。わたしは、もう我慢がまんがならなかつた。わたしは彼女に最後のいとまも言わずに、このまま別れてしまうに忍しのびなかつた。わたしは折りをうかがつて、傍屋へ出かけて行つた。

客間にはいると、公爵夫人が例によつて齒ぎれの悪い、だらし

のない挨拶でわたしを迎えた。

「どうしたことなの、坊ちゃん、お宅がこんなに早く引揚げなさるなんて？」と夫人は、両方の鼻の穴へ嗅ぎ煙草を詰め込みながら言った。わたしはその顔を見て、ほっと胸が軽くなった。あのフィリップの言った手形という言葉が、ひどく気になっていたのである。ところが彼女は、そんなことは鶺鴒の毛ほども考えてはいない……少なくともわたしには、その時そんなふうに見えたのだ。ジナイーダが、隣の部屋となりから姿を現わした。黒い服を着て、髪かみを梳すきだして、青い顔をしている。彼女は無言のまま、わたしの手をとると、自分の部屋へ連れて行った。

「あなたの声でしたので」と、彼女は口をきった。——「すぐ出

て行ったのよ。あなたはこんなに簡単に、わたしたちを捨てて行くのね、意地悪な子！」

「僕は、お別れに来たんです、お嬢さん」と、わたしは答えた。

——「たぶん、もうお目にかかる時はないでしょう。お聞きおよびのことでしょうが、わたしたちは引揚げるのです」

ジナイーダは、じつとわたしを見つめた。

「ええ、聞いたわ。来て下すってありがとう。もうお目にかかれないんじゃないかと思っていたのよ。わたしのこと、悪く思わないでね。時々あなたを、いじめたけれど、でもわたし、あなたの思つてらっしゃるほどの女でもないのよ」

彼女はくるりと向うをむいて、窓にもたれた。

「ほんとに、わたし、そんな女じゃないの。わたし知ってよ、あなたがわたしのことを、悪く思つてらつしやることぐらい」

「僕が？」

「そう、あなたが……あなたがよ」

「僕が？」と、わたしは悲しげに繰返した。そしてわたしの胸

は、うち克つことのできない名状すべからざる陶醉にいざなわ

れて、あやしく震え始めた。「この僕が？ いいえ信じて下さい、

ジナイーダ・アレクサンドロヴナ、あなたがたとえ、どんなこと

をなさろうと、たとえどんなに僕がいじめられたろうと、僕は一

つしようが、生涯あなたを愛します、崇拜します」

彼女はすばやくわたしの方へ向き直つて、両手を大きくひろげ

ると、わたしの頭を抱きしめて、熱いキスをわたしに与えた。その長い長い別れのキスが、誰を心あてにしたものか、神ならぬ身の知るよしもなかったけれど、わたしはむさぼるように、その甘さを味わった。わたしはそれが、もはや二度と返らぬことを知っていたのだ。「さよなら、さよなら」と、わたしは繰返した。：

彼女は、わたしを振りもぎって出て行つた。わたしも外へ出た。外へ出ながら、自分の胸中を去来した感情を、わたしは筆に伝えるだけの力がない。わたしは、またいつかそれが繰返されることを望みはしなかった。とはいえ、もしついぞ一度もそのキスの味わいを知らなかつたら、わたしは自分をよくよくの不仕合せ者と

思つたことだろう。

わたしたち一家は、町へ引揚げた。わたしは、なかなか過去と縁を切ることができなかつたし、そう手つとり早く勉強にかかることもできなかつた。心の痛手が癒えるまでには相当の時間が要つたのである。とはいえ、父その人に対しては、わたしは少しも悪い感情を抱いていなかつた。むしろ逆に、父はわたしの目に、一層大きな人物として映ずるふしもあつたのである。……この矛盾は、心理学者どもが、なんとでも勝手に解釈するがいろいろだ。ある日、わたしは並木道を歩いていると、ひよつくりルーシンにぶつかつたので、とびあがるほど嬉しかった。わたしは彼のまますくな、飾り気のない性質が好きだつたし、かてて加えて、

この久しぶりの面会が、わたしの胸に呼びさましてくれた追憶ついおくのおかげで、いやが上にも彼はなつかしい人物だったわけである。わたしは、その前へ飛んで行った。

「よう、これは！」と、彼は言つて、眉まゆの根を寄せた。——「なるほど、君だったんですね！ まあちよいと、顔を見せて下さいよ。相変らずの黄いろい顔だが、さすがに眼めの中に、一頃ひところの無分別さだけはなくなりましたね。やつと愛玩あいがん用の小犬じゃなくて、一人前の男に見えますよ。いや結構、そこでどうです、勉強めいけんしていただけますか？」

わたしは、溜息ためいきをついた。嘘うそをつくのはいやだったし、さりとて本音をはくのは恥はずかしかった。

「なあに、いいですよ」と、ルーシンは言葉を続けた。——「びくびくすることはいいです。肝心かんじんなのは、しゃんとした生活をして何事によらず夢中むちゆうにならないことですよ。夢中になったところで、なんの役に立ちます？ 波が打ちあげてくれるところは、ろくでもない場所に決ってますよ。人間というものは、たとえ岩の上に立っているにしても、やはり立つのは自分の両足ですからなあ。僕はこのとおり、どうも咳せきが出ていかんです。……ところでベロヴゾーロフは——あなた、何か噂うわさを聞きましたか？」

「なんですか？ 聞きませんが」

「ゆくえ不明なんです。カフカースへ行つたという話だが、君みたいなの若い人には、全くいい教訓ですな。要するに、潮時を見て

引揚げることに、網あみを破やぶつて抜ぬけ出すことが、できないからですよ。君はどうやら、無事に逃にげ出したらしいが、また網あみに引ひつかからないように用心しんしなさいよ。じゃ、さようなら」

『引ひつかかるもんか』と、わたしは思った。……『もう二度と再び、あの人には会あわないんだ』

ところがわたしは、もう一度ジナイーダを見かける運命にあつたのだ。

二十一

父は毎日、馬に乗のって外へ出でかけた。彼かれは赤栗毛あかくりげの、すばら

しいイギリス馬を持つていた。すらりと細長い首をして、よく伸のびた脚あしをして、疲れつかを知らぬ荒馬あらうまだった。その名を、「いなずま」《エレクトローク》》といつて、父のほかには誰だれひとり一人、乗りこなす人はなかつた。

ある日のこと、父は久方ぶりの上機嫌じょうきげんで、わたしの部屋へ入つてきた。彼はこれから馬で出かけるところで、ちやんと拍車はくしゃをつつけていた。わたしは、一いっしょ緒しよに連れて行つて下さいとせがんだ。

「まあそれより、馬とびでもして遊んだらいいだろう」と、父は答えた。——「おまえの瘦せ馬やうまじゃ、とてもついて来こられまいからな」

「ついて行けますよ。僕も拍車をつけるから」

「ふむ、まあいいだろう」

わたしたちは出発した。わたしの馬は、むく毛の若い黒馬で、

脚も丈夫だし、悍も相当つよかった。もつとも、エレクトリー

クが早足トロットいっぱい走り出すと、わたしの馬は全速力を出さな

ければならなかったが、とにかくわたしは食い下がって行つた。

わたしは、父ほどの乗り手を見たことがない。その馬上の姿は実

に美しく、無造作に楽々と乗りこなしているところは、鞍くらの下の

馬までが感じ入って、乗り手を誇りほことしていているように見えた。わ

たしたちは、並木なみきどお通りを片つぱしから乗り尽つくして、処女おとめが原はらも

しばらく乗り回し、垣根かきねも幾いくつか跳とび越こして（初めは跳とび越こすの

が怖こわかつたけれど、父が臆おくび病者びょうものを軽蔑けいべつするので、やがてわたしも怖こわがらなくなつた、モスクワ川を二度も渡わたつた。それでわたしは、もうそろそろ帰るのだろうと思つた。ましてや当の父が、わたしの馬の疲れたことに目をとめたからには、なおさらのことだつた。ところが父は、いきなりわたしのそばから馬首を転じると、クリミア浅瀬あさせからわきへそれて、河岸かしづたいにまっしぐらに飛ばし始めた。わたしは懸命けんめいにあとを追つた。古丸太が山のように積み上げてある所までくると、父はひらりとエレクトリークからとび下りて、わたしにも下りるように命じた。そして、自分の馬の手綱たづなをわたしにあずけると、しばらくその丸太積みのそばで待っているように言いつけて、自分は細い横町へ折れるな

り、姿を消してしまった。

わたしは、二頭の馬を引っぱって、エレクトロリークを叱りつけながら、河岸を行ったり来たりし始めた。エレクトロリークは歩きながら、ひっきりなしに頭を振りもぎったり、胴ぶるいをしたり、鼻を鳴らしたり、いなないたりした。わたしが立ち止まると、左右の蹄でかわるがわる土を掘ったり、けたたましい声を立てて、わたしの痩せ馬の首のままに噛みついていたりした。要するにまあ、あま甘やかされ放題のピュール・サン純血種らしく振舞ったわけである。父はなかなか戻って来なかった。川からは、いやに湿っぽい風が吹いてきた。ぬか雨が音もなく降り出して、さつきからわたしがさんざんそばをぶらついて、今ではもう飽き飽きしてしまった馬鹿げた

灰色の丸太の山に、べた一面ちっぽけな黒ずんだ点々をつけた。わたしは心細くなつてきたが、父はやっぱり戻つて来ない。フィランド人のお巡りまわさんが一人、上から下までやはり灰色の服を着け、壺つぼみみたいな格好かつこうの、おそろしく大きな古くさい筒形帽つつがたぼう子しをかぶり、ほこ形の警棒を小脇こわきにして、（それにしても、なんだつて巡査じゆんさがモスクワ川の岸になんぞいるのだろう！）わたしに近づいてきた。そして、婆ばあさんじみた皺しわだらけの顔をわたしに向けると、こう言った。――

「あんた馬なんか連れてこんな所で、何してるんですね、ええ、坊ぼっちゃん？ およこしなさい、持っていてあげるから」

わたしは返事をしなかった。彼は煙草たばこをねだつた。この男から

のがれたさに（それにまた、待ち遠しさに耐えかねもして）、わたしは父の立ち去った方角へ五、六歩あるいた。それから、その横町をはずれまで行って、角を曲ると、はたと立ち止った。その往来を、ものの四十歩ほど行った先の所に、木造の小さな家のあけはなされた窓に向つて、背中をこちらへ向けながら、父が立っていたのである。父は胸を窓がまちにもたせていた。家の中には、カーテンに半ば隠れながら、黒っぽい服を着た女が坐つて、父と話をしている。この女が、ジナイーダだった。

わたしは立ちすくんでしまった。全くのところ、そんなことは思いもかけなかったのである。わたしのしかけた最初の動作は、逃にげ出すことだった。『父は振ふりかえ返るかもしれない』と、わたし

ほほ笑^えんでいた。——従順な、しかも頑^{かたく}なな微笑^{びしょう}である。この微笑を見ただけでもわたしは、ああ、もとのジナイーダだなど思つた。

父はひよいと肩^{かた}をすくめて、帽子をかぶり直した。それはいつも決つて父がいらいらし出したしるしであつた。……それから「あ^{ヴー・ドヴエー・ヴー・セパレー・ド・セツト}あなたは思い切らなくちやだめです、そんな無理な……」という父の声^のがした。ジナイーダは、きつと身を起して、片手をさし伸べた。……その途端^{とたん}に、わたしの見ている前で、あり得^うべからざることが起つた。父がいきなり、今まで長上着^{フロック}の裾^{すそ}の埃^{ほこり}をはらつていた鞭^{むち}を、さつと振上げたかと思うと——肘^{ひじ}までむきだしになつていたあの白い腕^{うで}を、ぴしりと打ちすえる音がしたのである。

わたしは思わず叫び声を立てようとして、あやうく自分を押えた。ジナイーダは、ぴくりと体を震わしたが、無言のままちらと父を見ると、その腕をゆつくり唇へ当てがって、一筋真つ赤になつた鞭のあとに接吻した。父は、鞭をわきへほうりだして、あわてて玄関の段々を駆けあがると、家の中へとび込んだ。……ジナイーダは後ろを振り返ると、さつと両手をひろげ、顔をのけぞらせて、やはり窓から消えてしまった。

おどろき
驚きのあまり気が遠くなつて、おそろしい疑惑に胸を締めつけられながら、わたしはもと来た方へ駆け出して、横町を走り抜ける拍子に、すんでのことでエレクトロークの手綱を離すところだつたが、とにかく河岸へとつて返した。あたまがこんぐらかつ

て、全然まとまりがつかなかった。わたしは、冷静で自制力の強い父が、時々発作的な狂暴ほっさてき きようぼうを見せることは知っていたが、それにしても今しがた見た光景は、なんとしても合点がてんがゆかなかった。——とはいえ、わたしは同時にまた、このさき自分がどれほど生きるにせよ、ジナイーダのあの身の動き、あの眼差まなざし、あの微笑を忘れることは、終生ともできまい、——今まで見たこともないあの姿、思いがけなく今日わたしの眼に映ったあの姿は、永遠にわたしの記憶きおくに焼きつけられたのだ——とも感じた。わたしは、ぼんやり川に見入りながら、涙なみだのながれているのに気づかずずにいた。『あのひとが、ぶたれるのだ』と、わたしは思った。

『……ぶたれるのだ……ぴしり……ぴしり……』

「おい、どうしたね、——馬をおよこし！」と、後ろで父の声が出た。

わたしは、うわの空で手綱をわたした。父はひらりと、エレクトリックにまたがったが、凍こごえきつた馬はいきなり後脚で突つつ立たつて、一丈あまりも前へはねた。……だが父は、じきに馬をしずまらせた。ぐいと拍車を両の脇腹わきばらへ入れて、握にぎりこぶしで首に一撃いちげきを加えたのである。……

「ちえつ、鞭がない」と、父はつぶやいた。

わたしは、ついさっきの風を切る唸うなりと、その鞭がびしりと鳴った音を思い出して、おもわず震え上がった。

「どこへやったんですか？」と、しばらくしてからわたしは訊きいた。

た。

父は答えずに、ずんずん前へ飛ばした。わたしは追いついた。どうしても父の顔が見たかつたのだ。

「わたしのいない間、退たいくつ屈くつだつたらうな、お前？」と父は、へんにもぐもぐした声で言った。

「ええ、少しね。でも、一体どこへ鞭を落したんです？」と、わたしはまた訊いた。

「落したのじゃない」と、父は言い放つた。——「捨てたのさ」彼は急に考え込んで、うなだれた。……わたしはその時初めて、そして多分これを最後に、父のきびしい顔だちがどれほどの優やさしさと同情の思いを、表わすことができるかを見たのである。

父はまた馬を飛ばし出した。もうわたしは追いつけなかった。

わたしは十五分ほど遅れて、家に帰りついた。

『これが恋なのだ』とわたしは、その夜がふけてから、デスクの前に坐つて、またもやひとりごちた。そのデスクの上には、すでにノートや参考書がそろそろ並び出していた。——『これが情熱というものなのだ！……ちよつと考えると、たとえ誰の手であろうと……よしんばどんな可愛らしい手であろうと、それでぴしりとやられたら、とても我慢はなるまい、憤慨せずにはいられない！』ところが、一旦恋する身になると、どうやら平気でいられるものらしい。……それを俺は……それを俺は……今の今まで思い違えて……』

この一月ひとつきの間に、わたしは大層年をとってしまった。そして自分の恋も、それに伴ともなういろんな興奮や悩みなやも、いま新たに出現した未知の何ものかの前へ出すと、我ながらひどく小ちつぽけな、子供じみた、みすぼらしいものに見えた。とはいえ、その未知の何ものかの正体は、わたしにはほとんど推察することができなかつた。それはただ、自分が一生けんめい薄うす闇やみの中で見きわめようと空むなしい努力をしている、見知らぬ、美しい、しかも物もの凄すごい顔のように、わたしをおびえさせるだけであつた。

ちようどその夜、わたしは奇き妙みょうな恐おそろしい夢ゆめをみた。わたしは、天てん井じょうの低ひい暗あんい部屋へ入いって行くところだつた。……と父が、鞭むちを手に仁王におう立たちになつて、足を踏ふみ鳴ならしていた。隅すみの

方には、ジナイーダが身を縮めていたが、その腕にはなしに、その額に、あか紅い一筋がついている。……そこへ、二人の後ろから、体じゆう血だらけのベロヴゾーロフが、むくむく起き上がって、青ざめた唇を開くと、ふんぬ忿怒にわななきながら、父を脅おどかすのだった。

ふた月すると、わたしは大学に入った。それから半年後に、父は（のういっけつ脳溢血のため）ペテルブルグで亡なくなった。母やわたしを連れて、そこへ引移ったばかりのところだった。死ぬ二、三日前に、父はモスクワから一通の手紙を受取ったが、それを見て父は非常に興奮した。……彼は母のところへ行つて、何やら頼たのみ込こんだ。そして聞くとところによると、泣き出しさえたそうである。

あの、わたしの父がである！ 発作の起る日の朝のこと、父はわたしに宛^あてて、フランス語の手紙を書き始めていた。『わが息子よ』と、父は書いていた。——『女の愛を恐れよ。かの幸^{さち}を、かの毒を恐れよ』……

母は、父が亡くなったのち、かなりまとまった金額をモスクワへ送った。

二十二

四年ほど過ぎた。わたしは大学を出たばかりで、何を始めたものか、どんな扉^{とびら}をたたいたらいいのか、まだよくわからず、さし

当つてぶらぶら遊んでいた。ある晩のこと、わたしは劇場で、マ
イダーノフに出会つた。彼はめでたく妻帯して、役所に勤めてい
たが、わたしの目には少しの変化も見当らなかつた。相変らず、
要りもせぬのに感激かんげきしたり、例によつて、いきなり悄気しよげかえつ
たりした。

「君は知つてるでしょうね」と、話のついでに彼は言つた。――

「ドーリスカヤ夫人が、ここに來ていることは」

「ドーリスカヤ夫人というと？」

「おや、君は忘れたんですか？ もとのザセーキナ公こうしやくれいじよ 爵令

嬢嬢ですよ。みんなでてんでに恋こいしていた……いや、君だつてそ

うでしたね。覚えてるでしょう、あのネスクーチヌイ公園のそば

の別荘べつそうで、ね？」

「あのひとが、ドーリスキイとやらの奥おくさんになつたんですか？」

「そう」

「で、あの人がここに来てるんですか、この劇場に？」

「いや、ペテルブルグに来てるんですよ。二、三日前にやって来たんです。外国へ発たつつもりらしい」

「夫たすというのは、どんな人なんです？」と、わたしは尋ねた。

「なかなかいい男ですよ、財産もあるし。僕ぼくとはモスクワの役所の同僚どうりょうでしてね。あなたにもお察さつしがつくはずだが——例の一件以来……もちろんあれは、よく御存ごぞんじでしょうね……（マイ

ダーノフは、意味ありげにやりとして）あの人は配はい偶ぐうを求め

るのが、なかなか容易じゃなかつたんです。いろいろ、あとを引く問題もありましたからね。……だが、あの人の才智さいちをもつてすれば、どんなことでも可能ですよ。まあひとつ行つて御覧なさい。君の顔を見たら、とても喜ぶでしょうよ。あの人は、前よりもつと奇麗きれいになりましたよ」

マイダーノフは、ジナイーダの宿所を教えてくださいました。彼女かのじよはデムート館というホテルに泊とまっていたのである。昔むかしの思い出が、わたしの胸の中でうごめき始めた。……わたしは、あくる日すぐにも、かつての『想いびと《パツシア》』を訪ねようと心に誓ちかつた。ところが、何かと用事ができて、一週間たち、二週間たつてしまった。ようやくわたしが、デムート館へ出かけて、ドーリス

カヤ夫人に面会を申し入れると、——彼女は四日前に死んだ、と聞かされた。産のための、ほとんどあつという間もない死に方だった。

わたしは、何かしら心臓へぐつと、突き上げるものを感じた。わたしは彼女に会えたはずなのに、つい会わずにしまった、しかももう永久に会えないのだ……という想念——このにがにがしい想念が、ひしとわたしの心に食い入って、うちしりぞけることのできない呵責かしゃくの鞭むちを、力いっぱいふるうのだった。『死んだ!』とわたしは、入口番の顔をぼんやり見つめながら、鸚鵡返おうむがえしに言った。そして、そつと往来へ出ると、どこへとて当てもなしに歩き出した。過去の一切いっさいが、いちどきに浮うかび出て、わたしの眼め

の前に立ち上がった。そうか、これがその解決だったのか！ あの若々しい、燃えるような、きららかな生命いのちが、わくわくと胸をおどらしながら、いっさんに突き進んで行った先は、つまりこれだったのか！ わたしはそれを思いながら、あのなつかしい顔だちや、あのつぶらな眼や、あのふさふさと巻いた髪かみが、あの狭せまく美しい箱はこの中に納められて、じめじめした地下の闇やみのなかに眠ねむっているところを心に描えがいた。——それは、まだこうして生きているわたしから、そう遠くない場所なのだ。そしてひよつとすると、わたしの父のいる場所からは、ほんの五、六歩しかないかもしれないのだ。……わたしは、そんなことを考えながら、想像のつばさを張りきらせているうちに、ふと、

情け知らずな人の口から、わたしは聞いた、死の知らせを。

そしてわたしも、情け知らずな顔をして、耳を澄すました。

という詩の文句が、わたしの胸に響ひびいた。

ああ、青春よ！ 青春よ！ お前はどんなことにも、かかざら
わない。お前はまるで、この宇宙のあらゆる財宝を、ひとり占じめ
にしているかのようだ。憂ゆう 愁しゆう でさえ、お前にとってなぐさは慰めだ。
悲哀ひあいでさえ、お前には似つかわしい。お前は思い上がって傲ごうまん慢
で、「われは、ひとり生きる——まあ見ているがいい！」などと
言うけれど、その言葉のはしから、お前の日々はかけり去つて、

跡^{あと}かたもなく帳^とじりもなく、消えていつてしまうのだ。さながら、日^ひなたの蠟^{ろう}のように、雪^{ゆき}のように。……ひよつとすると、お前の魅力^{みりよく}の秘密はつまるところ、一切を成しうることにあるのではなくて、一切を成しうると考えることができるところに、あるのかも^もしれない。ありあまる力を、ほかにどうにも使^{つか}いようがないので、ただ風のまにまに吹^ふき散^ちらしてしまふところに、あるのかも^もしれない。我々の一人々々が、大まじめで自分を放^{ほう}蕩^{とう}者^{もの}と思^{おも}い込^こんで、「ああ、もし無^む駄^だに時^{とき}を浪^{ろう}費^ひさえしなかつたら、えらいことができたのになあ！」と、立派な口をきく資格があるものと、大まじめで信じているところに、あるのかも^もしれない。

さて、わたしもそうだったのだ。……ほんの束^{つか}の間^またち現^あわれ

たわたしの初恋はつこいのまぼろしを、溜息ためいきの一吐きひとつ、うら悲しい感かんしよくのひといぶ一息吹きをもつて、見送るか見送らないかのあの頃ころは、
 触ふのひといぶ一息吹きをもつて、見送るか見送らないかのあの頃ころは、
 わたしはなんとという希望に満ちていただろう！ 何を待ちもうけていたことだろう！ なんとという豊かな未来を、心に描いていたことだろう！

しかも、わたしの期待したことのなかで、いったい何が実現しただろうか？ 今、わたしの人生に夕べの影かげがすでに射さし始めた時になつてみると、あのみるみるうちに過ぎてしまった朝まだきの春の雷雨らいうの思い出ほどに、すがすがしくも懐なつかしいものが、ほかに何か残のこっているだろうか？

だがわたしは、いささか自分につらく当り過ぎていようだ。

その頃——つまりあの無分別な青春の頃にも、わたしはあながち、わたしに呼びかける悲しげな声や、墓穴ぼけつの中からつたわつてくるそうごん莊嚴な物音に、耳をふさいでいたわけではない。忘れもしないが、ジナイーダの死を知った日から四、五日して、わたしは自分でどうしてもそうせずにはいられなくなつて、わたしたちと一つ屋根の下に住んでいたある貧しい老婆ろうばの、臨終りんじゆうに立ち会つたことがあつた。ぼろに身を包み、こちこちの板の上に横たわり、ふくろ袋を枕まくらがわ代りにした老婆は、苦しみもがきながら息を引取つた。彼女の一生は、その日その日の乏とほしい暮しに、あくせく追われ通しで過ぎたのだ。喜びというものをついぞ知らず、幸福あまの甘い味わいも知らない彼女としては、まさに死をこそ、——そのもたら

す自由を、そのもたらす慰いこいをこそ、喜び迎むかえるべきではなかつたか？　ところが、彼女の老おいさらばえた肉体がまだ保もっているうちは、その上に置かれた氷のように冷え果てた片手のもとで胸がまだ苦しげに波うっているうちは、まだその身から最後の力が抜ぬけきらないうちは、老婆はひっきりなしに十字を切り続けて、「主よ、わが罪を許させたまえ」とささやき続けるのであった。

——そして、これを名残なごりの意識のひらめきが、すつと消えると共に、彼女の眼の中でも、末期まつごの恐れやおびえの色が、やつと消えたのである。忘れもしない、そのとき、その貧しい老婆のいまわの床とこに付き添そいながら、わたしは思わずジナイーダの身になって、そら恐ろしくなってきた。そしてわたしは、ジナイーダのた

めにも、父のためにも、そしてまた、自分のためにも、しみじみ
祈いのりたくなつたのである。

青空文庫情報

底本：「はつ恋」新潮文庫、新潮社

1952（昭和27）年12月25日発行

1987（昭和62）年1月30日73刷改版

1997（平成9）年5月25日92刷

※底本の二重山括弧は、ルビ記号と重複するため、学術記号の「《》」（非常に小さい、2-67）と「《》」（非常に大きい、2-68）に代えて入力しました。

入力：松永佳代

校正：阿部哲也

2011年9月28日作成

2013年1月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

はつ恋

ツルゲーネフ

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 神西清訳
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>